

私の自己点検	1
2023(令和5)年度「指定研究」等研究成果報告	2
2023(令和5)年度東京分室PD研究員個人研究成果報告	14
公開シンポジウム報告	18
公開研究会・講演会報告	22
国内研究調査報告	30
海外研究調査報告	34
数異抄ワークショップ開催・参加報告	36
衆報	38

研究所報

No.84

2024. 9. 1.

私の自己点検

研究・国際交流担当副学長 真宗総合研究所長 廣川 智貴

2023年4月から真宗総合研究所長を拝命し、早いもので1年ほどが経過した。いまだに慣れぬことも多く、右往左往している。本学には人文学系から自然科学系まで、多様な分野を専門とする教員が在籍している。このような教員の研究成果のおかげで、本学が社会から信頼される研究機関たりえていることを今さらながら実感している。真宗総合研究所では、「特定研究」「指定研究」「一般研究」のもと、各研究班の研究が精力的に進められているが、これらについては各研究班の報告に委ねたい。

さて、とかく研究者というものは、自分の研究に集中しがちである。たとえ同僚であっても、その仕事を理解していないことも多い。かくいう私も、ある程度の年数を本学で過ごしなが、専門の詳細まで把握している教員はごく限られている。この意味で、現在の役職に就き、研究環境をめぐる状況や、本学の教員の研究内容を知る機会に恵まれたことは、じつにありがたいことである。「研究者にはこのようなことが求められているのか」と再確認し、「同じ人文系でもこうした調査があるのか」、「自然科学系ではこうして仕事を進めるのか」など、驚きの連続である。このように研究をめぐる状況にふれていると、おのずと自身のことを振り返ることになる。「おまえはちゃんと研究しているのか?」。先日、学内の自己点検作業を終えたばかりだが、これを機に私も自分の研究を点検してみよう。

まずは「計画性」についてである。周知のように、科研費をはじめとする各種書類では、研究計画の作成が求められる。だが、私は計画、とりわけ長期計画が苦手である。夏休みの宿題を最終日に片づけていた小学生時代を思い出す。とくに駆けだしのころは、気の向くままに研究していたように思う。年始を迎えると、「今年はこんな論文を書こう」と漠然と考えはするが、およそ「計画」とよべるものではない。一文程度の思いつきである。しかもすぐに頓挫する。アイデアを記したはよいが、それが論文になるのに数年かか

ったこともある。情けない話だ。だが、そうしたきっかけから書きためてきたものをふり返ると、あたかも計画されていたかのように、各論文のあいだには一本の筋が通っていることに気づく。ことほどさように「計画」は計りがたい。

次なる点検項目は「国際化」である。ドイツ文学を学んできた私は、修士論文を除いては、これまで日本語で論文を書いてきたから、この点でも反省しなければならない。学術の国際化が言われて久しいが、私は欧文ではなく、日本語で書くことを大切にしてきた。自分がドイツ語を読み、考えた内容を、まずはドイツ語を解さない母語話者に伝えたかったからだ。専門的な事柄を日本語で表現することは「通俗化」ともよばれ、あまり評価されないが、そうした営みにこそ惹かれる。私が専門とする18世紀ドイツは、ヨーロッパの後進国であった。それゆえに、イギリスやフランスの書物を翻訳し、自国の文化を形成し、できることならそれを豊かなものにしようと奮闘した。私は、そうした「通俗的な」仕事をした作家に魅力を感じてきた。「なにを今さら」という声もあるだろうが、これは昔話ではない。重要かつ知られていない作家が、未発掘の宝の山が、まだまだ残されているのだから。むしろ欧文で発信したいこともあるが、これは今後の課題である。

私の自己点検はざっとこんなところである。なんともお恥ずかしい結果となったが、これはこれとしてしっかり受けとめよう。自己点検をはじめとする、研究機関への要請は、年々厳しくなっているように思われる。私たち研究者は、そうした求めに応えつつ、研究成果を生みださなければならない。このような要請が生じるのにはそれなりの理由があるだろう。しかし、それが研究者の創造性を妨げることになっては本末転倒である。与えられた状況のなかで、研究者が最大限のパフォーマンスを発揮できる自由な空間、真宗総合研究所はそのような場所でありたいと強く思う。

2023（令和5）年度「指定研究」等研究成果報告

特定研究「大谷大学樹立の精神」100年

佐々木月樵が「大谷大学樹立の精神」に込めた願いとその背景を尋ねる

研究代表者・教授 一楽 真
(真宗学)

大正時代、1918（大正7）年に「大学令」が出され、帝国大学以外の公立・私立の大学が認められることとなり、大谷大学は1922（大正11）年に大学令による大学として認可されているから、いち早く認可を受けた大学の一つである。そして、校名も「真宗大谷大学」から「大谷大学」へと改めた。その大谷大学が誕生した2年後の1924年に第3代学長に就任した佐々木月樵は、翌1925（大正14）年5月1日の入学宣誓式において、「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大学令に基づく大谷大学としての使命を述べる。この言葉は初代学長清沢満之の「真宗大学開校の辞」と併せて、本学の建学の精神として位置づけられている。

来年2025年には「大谷大学樹立の精神」が発表されてからちょうど100周年となる。100年を迎えるにあたり、「大谷大学樹立の精神」に込められた佐々木月樵の願いをあらためて確かめていくことが本研究班の大きな目的である。

この目的を達成するためには、まず佐々木の生涯や著述活動の全体像を把握することが必須となる。佐々木月樵の著作に関しては、すでに『佐々木月樵全集』（全6巻）にまとめられているが、そこに収載されているものは著作などのごく一部であり、論文やエッセイ等の収載されていないものが多く残されている。

本研究班では、『佐々木月樵全集』に収められていない著作について、それらを収集してデータ化し、その一つひとつについて校正・読解・検討する作業から始める。幸いなことには、すでに2006年度「大学史研究班」によって佐々木に関する文献はかなり収集されており、そのリストも残されている（そのリストによれば、592点の論文・エッセイなどが確認できる）。

本研究班においては、まず「大学史研究班」によって作成されたリストをあらためて精査・整理し、収集されていない文献についてはそれらを収集し、すでに収集されている文献についてはデータ化して校正していく作業をおこなう。

その文字起こしと校正作業においては、本文を原本通りに文字起こし、明らかな間違いが認められる場

合には、注記することとしている。なお、漢字表記については新字（現行の通行体）に改めている。文字起こしには大学院生の研究補助者にアルバイトとして協力を依頼し、出来上がった文字起こしデータを研究会の組上に上げて読み合わせをして校正している。2024年4月の時点で25点の論文の校正が完了しており、今後は研究補助員（RA）の協力を得ながら、その校正した原稿を共有のデータに反映する作業を順次進めている。

本研究期間内には、今後も大谷大学として佐々木月樵研究を継続していくための基盤を整備することが主な課題であると認識している。その基盤の整備とは、佐々木の論文・エッセイ等の収集・整理とデータ化、さらには校正や読解など多岐にわたる基礎的作業を経て、佐々木の著述活動の全体像を把握する必要がある、これらには今後も多少の時間を要することになるであろう。最終的な目標としては、佐々木月樵の小伝、および「樹立の精神」を学生や教職員が学ぶための副読本の作成を目指しているが、2年間の研究期間内には、そうした刊行物作成の基盤を整備することを主な目的とし、研究期間終了後も、教員や大学院生が中心となって佐々木月樵研究を継続していける体制を整えていきたいと考えている。

国際仏教研究

欧米諸国における仏教研究の動向
の把握と資料の収集・整理・公開研究代表者・教授 井上 尚実
(真宗学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。

仏教学・宗教学の分野における国際化は新型コロナウイルスの感染拡大 (COVID-19) による影響を受けた後も、研究活動の形態は多様化しているが、2023年度から、新たな体制のもと、国際仏教研究が古くから取り組んできた「受信」と「発信」の役割を果たし続けている。

2023年の研究活動は以下の5点に集約することができる。

①国際学会・ワークショップへの研究員派遣

カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所・龍谷大学世界仏教文化研究センターと合同で『歎異抄』翻訳研究ワークショップを継続的に開催した。2023年度は、以下の2回のワークショップが実施された。

- 1) 第11回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
6月9日(金)～11日(日)龍谷大学
 - 2) 第12回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
2024年3月22日(金)～24日(日)カリフォルニア大学
バークレー校 (会場は浄土真宗センター)
- 第12回のワークショップの詳細については、本所報掲載の参加報告を参照。

②国際シンポジウムの開催

12月15日(金)～17日(日)に本学を会場に“Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions” (世界の宗教的伝統におけるさとりと知恵と変容) をテーマとするシンポジウムを開催した。世界各国から約30名の研究者を招聘し、研究発表と討議を行った。詳細については、本所報掲載の参加報告を参照。

③国際シンポジウムの成果出版

2018年に学術交流協定校 ELTE の主催で開催された第3回国際仏教シンポジウム「Buddhism in Practice」の研究成果は、同研究所発行の『*Journal of East Asian Cultures*』第15巻第2号に掲載された。

同誌は、10月に発行され、オンラインにも閲覧可能となっている。掲載された本学の関係者の論文は以下の通り (同誌掲載順)

Michael Conway. “Practice and Other Power in Dao-chuo’s Pure Land Buddhism.” (上掲誌1頁～30頁)

Masafumi Fujimoto. “Shinran’s ‘Practice’: The Shin Buddhism Turn in the Buddhist Understanding of Practice.” (上掲誌31頁～39頁)

Yasushi Kigoshi. “Recent Trends Concerning the Issue of ‘Buddhism and Practice’ in Contemporary Japan.” (上掲誌59頁～71頁)

Robert F. Rhodes. “Can Arhats Attain Buddhahood? An Issue in the Interpretation of the *Lotus Sūtra*.” (上掲誌87頁～94頁)

Makio Ueno. “On Listening to Buddha’s Words with Reverence: The Very First Step of Buddhist Practice in Vasubandhu’s *Vyākhyāyukti*.” (上掲誌109頁～122頁)

④「女性と仏教」に関する国際的研究の継続

「女性と仏教」をテーマとする国際的な研究者との関係を開拓し、2019年度のワークショップに続くさらなるワークショップの開催に向けて準備を整え始めた。特に「女性と仏教」をテーマとする研究を収集し、データベースを作成し始めた。

⑤Shinshu Center of America の英訳事業への協力

2023年8月にアメリカ真宗センターの出版担当と会い、金子大榮師の『浄土の観念』の英訳プロジェクトの出版スケジュールに関して打合せをした。2024年度中に、出版準備に取りかかることができるように原稿を準備することにした。

東アジア・北アジア仏教研究

仏教を基軸とする東アジア・北アジア学術研究ネットワークの構築

研究代表者・教授 松川 節
(人文情報学・東洋史学)

本研究は、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を発信していくために、アジアにおける仏教研究の動向を把握するとともに、東アジア・北アジアにおいて本学が学術協定を締結している諸機関との共同研究ネットワークを強化し、本学が研究のハブとなってアジア仏教の研究を推進することを目的としており、2023年度は次の3つの研究活動を行った。

①「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウム（2015年12月開催）の成果論文集の出版、『日本仏教概説（ベトナム語版）』の出版

前者については中文原稿の翻訳を完了し、校正段階である。後者については、ベトナムで出版するために、ハノイの宗教研究院と出版に関する覚書をかわし、宗教研究院を通じて出版に関わる具体的な段取りについてハノイの出版社と取り決めを行った。他方、翻訳者である Pham Thi Thu Giang 先生と内容について協議を重ねたうえで、出版社にベトナム語の原稿を入稿した。そして、印刷所から届けられた下刷りの校正作業を行った。現在、校正作業の最終段階にある。

②中国社会科学院古代史研究所と本学との研究者往来による共同研究については、2024年3月に松川研究員と井黒研究員が北京を訪問して共同研究の再開を協議する方向で調整したが、年度内に実行に至らず、次年度に持ち越すこととなった。一方、中華人民共和国故宮博物院図書館との共同研究については、故宮博物院図書館の春花研究員が2023年6月～11月に本学に客員研究員として滞在する期間を中心に嘱託研究員として、本学所蔵仏教文献と故宮博物院図書館所蔵仏教文献との文献学的比較研究を行い、特に本学図書館所蔵のモンゴル語文献について2023年9月26日に春花研究員と松川が調査・記録を行った。

③モンゴル国立大学と本学との共同現地調査については、モンゴル国ドルノド県ツァガランオボー郡に位置するヘルレン・バルス・ホト都城址（八角仏塔を含む）を対象として行った。大谷大学側は松川節研究員（社会学部教授）と井黒忍研究員（文学部准教授）、モンゴル側は U. エルデネバト・モンゴル国立大学総合科学部社会科学系人類考古学科長（教授）が参加し、2023年9月4日～11日の日程で実施した。ヘルレ

ン・バルス・ホト第Ⅰ遺跡は2014年4月に大谷大学真宗総合研究所（松川、武田）とモンゴル国立大学総合科学部（U. エルデネバト）との共同研究プロジェクトにおいてすでに調査済であるが、今回再調査（9月8日～10日）に赴いたのは、この遺跡が10～12世紀の契丹時代に築城され、14世紀の元朝末期にも使われ、さらに16～17世紀前半に仏教寺院が新たに建立されるという3つの文化層を持つ可能性が指摘されているからで、今回は1）城外東方に建つ七層八角塔と城内建造物址・仏塔址の再考察、2）ドローンを使用した城壁全体の計測、3）北城壁の不規則性の考察を行った。

9月6日(休)11:30、ガンダン寺学術文化研究所を訪問し、N. アムガラン同研究所研究員・事務局長、B. ムンフバートル・図書館長兼外事室長と会見し、今後、共同研究「ガンダン寺所蔵文献と本学図書館所蔵文献の比較研究」を推進していく点で合意に達した。

モンゴル国立大学と本学との研究者往来による共同研究については、P. デルゲルジャルガル嘱託研究員（モンゴル国立大学科学学部人文系歴史学科教授）を11月28日～12月5日まで招聘し、12月1日(金)16:30～18:10に東アジア・北アジア仏教研究班主催の公開研究会を開催し、P. デルゲルジャルガルの講演「草原のシルクロードと仏教の弘通」を拝聴した。匈奴、柔然がシルクロードとどこから、どのように結びついたのか。匈奴の軍はどのルートから西域に至ったのか。進軍ルートと交易路は同一であったのか。モンゴルの地に仏教はどこから、どのようなルートで伝播したのかといった疑問に答えて、匈奴の僮僕都尉は焉耆、トゥルファンから現在のボドンチ峡谷、現在のホブドのボルガン、あるいは焉耆、トルファン、哈密からタムチーン・ダワー、アルタイ山脈を越えて現在のゴビ・アルタイのシャルギーン・ゴビを抜けて匈奴の地に至ったのであり、そのためハミ、トゥルファンの北にシルクロードとモンゴル中央を結ぶシルクロードの北の分流となる「草原のシルクロード」が匈奴時代に成立しているべきであるとみなした。また、タリム盆地と匈奴、柔然を結んでいた「草原のシルクロード」は交易路のみならず、宗教文化、軍事戦略の道でもあり、このルートにより文化の交流が起り、仏教や文字が伝播した。ブラーフミー文字（例えばフイス・トルゴイのブラーフミー碑文）がモンゴルの地に伝播したのは、このルートの文化交流の結果であるとした。

チベット文献研究

大谷大学所蔵チベット語文献
の研究研究代表者・教授 三宅 伸一郎
(チベット学)

大谷大学は北京版チベット大蔵経や貴重な蔵外文献をはじめとする多数のチベット語文献を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究のための重要な資料でもある。本研究は、これら本学所蔵の文献資料を解説するとともに、特に貴重と思われるものについては専門の研究者が十分に研究活用できるような形で公開することを目的としている。また、海外の研究機関との交流を通して、それらの研究機関に所蔵されているチベット語文献などの学術資源等の調査研究に取り組み、本学所蔵の各種資料との比較研究のための研究資源を形成することを目指す。

上記目的を達成するために、現在は特に、本学所蔵の以下のチベット語文献の公開を目指し研究を行っている。

- ・蔵外 no.12767 : 『聖大集目連菩薩救母経 (‘Phags pa ’dus pa chen po byang chub sems dpa’ mo’u ’gal gyi bus ma la phan btags pa’i mdo)』

本学図書館に所蔵されているものは、黒地に金銀泥写の写本で、全部で127葉から成る。チベットのラサを目指しながらも、雲南で帰らぬ人となった能海寛(1868-1903)によって収集されたものとされている。

本経は、目連が地獄に堕ちた母を救う、いわゆる「目連救母説話」を内容とするものである。「経」と題され、冒頭に「インドの言葉で (rgya gar skad du)」とサンスクリット語による題名(ただし、そこに記されている題名は本経のチベット語題名と完全に一致しない)が記されていること、翻訳の奥書が記されていることから、サンスクリット語からの翻訳仏典を主張している。しかし、全28章のうち第1章から第5章までの内容が『宝星陀羅尼経 (‘Phags pa ’dus pa chen po rin po che tog gi gzungs zhes bya ba theg pa chen po’i mdo)』の第1章から第5章と一致すること、奥書に翻訳者としてヴィドヤーカラシンハ (Vidyakarasimha) とイエシェーデ (Ye shes sde) という若干時代の異なる人物が挙げられていること、『デンカルマ (lDan dkar ma)』『パンタンマ (‘Phang thang ma)』をはじめとする訳経目録にその名が見られないことから、本経は、テキスト自身が主張するような翻訳仏典ではなく、チベットで選述された「擬

経」と考えられる。そもそも「目連救母説話」は中国で成立したものであり、その意味で本経は、中国仏教とチベット仏教の交流史を考える上で重要な資料でもある。

チベットにおいて本経と同じく「目連救母説話」を説くものとしてはまず、敦煌文献中 (ST686) に、8世紀前半に漢蔵仏典翻訳に従事した僧・法成 (Chos grub) による『孟秋施物縁起要説 (sTon zla raba nya la dur tshun ci’i phyir byed pa’i lo rgyus mdo tsam du bstan pa)』と題するものが挙げられよう。時代が降り、カダム派の学僧ポトパ (Po to pa Rin chen gsal, 1027-1105) の説法集『喩法 (dPe chos)』の中にもこの説話が見られる。また、ニンマ派の埋蔵文献発掘者グル・チョワン (Gu ru chos dbang, 1212-1270) の伝記の中に「彼が地獄に堕ちた母を救出する」という、この説話を基にして作られたと考えられるエピソードが収められている。そのため、チベットにおいて「目連救母説話」は、12世紀初頭から13世紀にかけて広く知られ、関連するチベット語文献が選述されていったことが窺える。そうした中で、現在研究に取り組んでいる『聖大集目連菩薩救母経』同様、題名に「経」を冠しているものとしては、写本系カンギュルに収録されている

- ・『善巧方便父母報恩経 (Thabs mkhas pa chen po pha ma’i drin lan bsab pa’i mdo)』(ブタク写本カンギュル mdo sde vol.wa に所収)
- ・『大目犍連救堕地獄母経 (Mo’u dgal gyi bu chen po ma dmyal khams nas drangs pa’i mdo)』(ヘミス寺カンギュル等に所収)

があげられる。また、死後の世界を見聞した蘇生者 (das log) たちの話をまとめたシリーズの中に

- ・『父母報恩より、長老目連が母を地獄から救出する経 (‘Phags pas pha ma drin lan bsab pa las / tshe dang ldan pa mo’u ’gal gyi bus ma dmyal khams nas drangs pa zhes bya ba’i mdo)』(和訳あり：新井慧譽「チベット文『目連救母経』和訳」『インド学仏教学論集：高崎直道博士還暦記念論集』春秋社、1987年、pp.427-445)

がある。さらに、ボン教大蔵経カンギュル (mdo sde vol.45) にも「目連救母説話」と同じく死後地獄に生まれた母を息子が救出するという内容の経が存在する。

- ・『長老ラウ・ペマトゥルが母を地獄より救出する経 (Tshe dang ldan pa lha bu pad ma ’phrul zhes bya ba des / ma dmyal khams nas drangs pa’i mdo)』

以上のように数多く存在する「目連救母説話」に関連するチベット語文献の中で、現在研究に取り組んでいる『聖大集目連菩薩救母經』は、国外の研究機関にごくわずかに見られるのみで、しかも、公開はされていない。この貴重な文献の公開を目指し、2023年度は、研究補助員・三輪悟士氏の協力を得てテキスト全体の入力を行った。また、今後の比較研究に資することを目的として、プタク写本カンギル所収の『善巧方便父母報恩經』の入力も行った。また、ボン教の『長老ラウ・ベマトゥルが母を地獄より救出する經』についても入力作業に着手した。なお、『聖大集目連菩薩救母經』の概要については後述する中国藏学研究中心との国際共同研究会「藏文文献と梵文写本」にて報告した。

(2) 蔵外 11841『ブトン仏教史』の翻訳研究

本文献は、14世紀チベットを代表する学者プトン・リンチェンドゥブにより著されたもので、インド・チベット仏教史およびチベット大藏經成立史を研究する上での基本資料として詳細な研究がなされてきた。しかし、その第1章仏教概説の部分は、14世紀チベットにおける仏教理解の一端を解明する上で必要不可欠な資料であるにもかかわらず、未だ詳細な研究はなされていない。その理由は、研究のための基本的な作業がなされていなかったためである。この現状に鑑み、本研究班では2022年度に引用箇所の同定を注記した校訂テキストを刊行した。2023年度はこの校訂テキストに基づき和訳研究を行った。本研究には、研究員・上野牧生准教授が従事した。2023年度は、プトンによる「法」の分析を示した第1章第2節のうち、2.3「定義」(mtshan nyid) から2.4「分類」(rab tu dbye ba) の第3項、2.4.3「教としての法」(bshad pa'i chos) の冒頭部までの和訳研究の成果を『「ブトン佛教史」試訳(4)』と題し、『研究所紀要』第41号(pp.51-74)に発表している。この研究の中では、プトンが「法」に対する分析を示すにあたって依拠しているものが、阿含經典に基づくヴァスバンドゥの『釈軌論』『俱舍論』『緣起經論』であるため、その「法」の分析は大乗のものではなく声聞乘のものになっていることが指摘されている。また、上記校訂テキストの訂正と引用箇所の同定に関する追記も示されている。

(3) 『モンゴル仏教史』の翻訳研究

2019年に本研究班が刊行したイエシエー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』(寺本婉雅旧蔵)を、そのモンゴル語版と対照し詳細な和訳研究を行っている。この研究には、囑託研究員・伴真一朗氏が昨

年度より継続して従事している。2023年度の成果としては、チベット語版の7a5-9b6、モンゴル語版の6v5-9v9までの箇所、具体的には、モンゴル帝国第2代ハーンのおゴデイから元朝の成立、北元の初期までに関する記述部分に対する研究成果を「イエシエー・ペルデン著『モンゴル仏教史・宝の数珠』チベット・モンゴル語対照訳注(3)」と題し、『研究所紀要』第41号に発表している。その中で、チベット語版とモンゴル語版との対照結果として、モンゴル語版のモンゴル文にはチベット文的な形式が見られること、チベット文の意味を十分に理解せず直訳したと思われる箇所が存在することなどが指摘されている。また、北元の歴史記述については、17世紀以降に成立したモンゴル語年代記と類似した記述がなされていること、元朝の征服範囲を示す記述の中に出る地名 gzhi ben が日本を指すのではないかと指摘されている。

(4) 海外の研究者・研究機関との交流

2023年7月24日、ハーバード大学南アジア研究部門 Associate の目片祥子氏を講師として「チベット・モンゴル仏教史研究の一側面: Nyer mkho mthong ba don yod を中心に」とのテーマで公開講演会を開催した。詳細は『研究所報』No.83, pp.20-21に報告している。

2023年9月13日、大谷大学真宗総合研究所と中国藏学研究中心(China Tibetology Research Center)との間に、学術交流協定の再締結が行われた。これを記念して「藏文文献と梵文写本」と題する国際共同研究会を実施した。研究会では以下4名による研究発表が行われた。

1. 李学竹(Li Xuezhu)「関于中国藏学研究中心梵文研究的情况」
2. 上野牧生「『普賢行願讃』の注釈について－梵文写本・敦煌写本・四種の蔵訳－」
3. 索南多杰(bsod nams rdo rje)「中国藏学研究中心“藏文文献資源数据中心”建設情况」
4. 三宅伸一郎「チベット語文『目連救母經』について」

その詳細については、『研究所報』No.83, pp.22-23に報告している。

清沢満之研究

清沢満之の生涯と思想の研究
— 西方寺所蔵文献の研究 —研究代表者・准教授 西本 祐攝
(真宗学)

■はじめに

本研究は、清沢満之の生涯と思想の研究を進めることを目的に、その研究において重要な意義を有する西方寺所蔵清沢満之自筆文献（以下、西方寺所蔵文献と略）についての研究を行っている。本研究では西方寺所蔵文献の影印（36枚撮りフィルム248本分、総コマ数8500枚超）を所蔵している。

これは、1998年度から西方寺の全面的な協力をいただき、西方寺所蔵文献の蔵書整理、文献調査、調査カードの作成、文献目録作成、写真撮影、内容精査等を行ってきたことによる。それらのうち、現在、『清沢満之全集』（以下、『全集』と略）及び『全集』別巻等で公開済の文献はその3分の1程である。これは、『全集』及び別巻が主に清沢満之自身の著述を収録し、清沢満之が受講した講義ノートや書籍からの抜書、索引等は収録しないという方針で編纂されたことによる。未公開文献には、清沢満之の育英教校、帝国大学、真宗大学寮の頃から後年に至るまでの文献が含まれており、帝国大学時代については「真宗学」「仏教学」「歴史学」「哲学」「生理学」「儒学」「数学・化学」「心理学」「語学」「和文学」等の受講ノートを確認することができる。

本研究は、これまで『全集』及び別巻に掲載されていない西方寺所蔵文献の翻刻・校正を継続的に行っているが、これらについて研究を進めることは、清沢満之の生涯と思想の研究に大きく資するものであることを再確認するに至った。執筆時期も分野も内容も多岐に及び、すべてを一度に公開することは一朝一夕に実現可能なことではないが、貴重な清沢満之自筆文献の影印を預かる本研究が継続的になすべき研究である。

本年度は、研究期間の3年目にあたり、昨年度までの作業を継続して、西方寺所蔵文献についてその全貌を明らかにするための研究を行った。

以下に、その活動概要について述べる。

■活動の概要

西方寺所蔵文献の未公開分は、分量にして36枚撮りフィルム167本分、総文字数3,703,420字である。今年度も3カ年の研究計画に挙げた西方寺所蔵文献リストの作成に向けて、文献確認作業を継続した。この

確認とともに、各文献の執筆年時、性格、内容を踏まえた解題を作成し、執筆年時が判明したものについては、清沢満之の年譜にプロットしていく作業を並行して行った。昨年度までに、すべての文献について基礎的な確認作業を終えることができたが、その過程で、各文献の執筆時期等、個別に調査すべき課題も見つかった。年時を確定することが困難と考えられるメモ、文字の練習等の記述もあるが、本年度はできるだけ、それらを確定する作業を重ねた。

その概要は、次の三点である。

- 1、西方寺所蔵文献のリスト整理
- 2、未公開文献の校正・整理・解題等作成
- 3、出張調査

1、西方寺所蔵文献のリスト整理

本研究は、西方寺所蔵文献の調査時の調査カードをもとにした文献リストを所有している。この文献リストは調査時に文献整理を目的として作成したものであり、文献ごとに通し番号を付し、それぞれの形態や法量などの詳細を記録したものである。しかし、旧来の文献リストでは、本研究が所蔵する各写真のいずれが『全集』収録・未収録かについて整理されていない。昨年度に引き続き、それらを明確に判別したリストを新たに作成する作業を継続的に行った。旧来の文献リストは写真フィルム番号ごとに整理されているが、それでは全貌を把握していくには十分とは言えない面があり、フィルム番号内の写真番号（以下、写真番号と略）ごとに詳細に分類した新たなリストを作成する作業を行った。この方針に基づいて、以下の二つに分類して西方寺所蔵文献の新たな文献リストを作成しその充実をはかっている。

Ⅰ、『全集』収録済文献リストの充実

Ⅱ、『全集』未収録文献リストの充実

Ⅰ、『全集』収録済文献リストの充実

『全集』収録済の西方寺所蔵文献リストを整理し、『全集』の収録巻・頁と写真フィルム番号・写真番号が対応するよう確認する作業である。『全集』に掲載された文献が西方寺所蔵文献の写真フィルム内のいずれの写真番号の文献に基づくかについてのより詳細なリストを作成することで、その対応関係を容易に確認することが可能となる。この作業については、昨年度までに対象の全文献をあたり終えていたが、詳細の確認が必要な文献があり、今年度はその作業を行った。3カ年の研究期間で『全集』および別巻収録済文献のすべての写真フィルムについての作業を完了した。

Ⅱ、『全集』未収録文献リストの充実

西方寺所蔵文献には、一つの文献内に性格の異なる

記述が複数存在するものを多く確認できる。例えば一冊のノートにも和文文献と英文文献やメモ等が混在しており、その内容を一つの文献としてリストに記載することは適切ではない。旧来の文献リストはそれらを明確に分類するものではなく、未公開文献の詳細を把握する上では十分ではない面があった。そのためノート内の記述ごとにその内容が区切られると考えられ得る箇所区分し、文献名称の有無等を基準とする種別を示す分類記号を定めリストに記載していく作業を行った。この作業についても、昨年度までに対象の全文献をあたり終えていたが、詳細の確認が必要な文献があり、今年度はその作業を行った。3カ年の研究期間内に、すべての写真フィルムの確認作業を完了した。

2、未公開文献の校正・整理・解題等作成

未公開文献の各文献内容を把握していくために、上記したリスト作成と並行して、文献ごとの内容確認を踏まえた簡易的な解題（200字程度）を作成し、さらには文献内の目次を付す作業である。文献ごとの性格（講義筆録、メモ、目録、索引等）、執筆時期、執筆経緯等を把握していくことを目的とした研究活動である。これらの作業において新たに執筆時期を確認できた文献がある。それらの成果を清沢満之の生涯と思想の研究に反映していくため、『全集』第9巻に掲載する清沢満之の年譜に、その情報を加えていく作業を行っている。この研究により、従来、明らかになっていない清沢満之の生涯における事績や思想形成過程についても明らかにすることが可能となる。昨年度までに全文献についてあたり終えていたが、この研究については現在も詳細について確認が必要な文献が未だ残されている。これらの研究内容は、概ね以下の三点に分類できるものである。

I. 未公開文献の内容確認

II. 解題・目次の作成

III. 年譜の作成

未公開文献内には清沢満之の学生時代の記録が多く残されている。これらを年譜に反映させていく作業では、各年の事績と並行して各在籍年度、期別ごとにその事績をあきらかにできるよう年譜の作成を進めた。これらの作業を通して、清沢満之の育英教校時代、帝国大学時代等における思想形成の一端を明らかにすることができた。

3、出張調査

昨年度末までに本研究が所蔵している全写真データについての確認を一旦、終えていたが、その中で、写真撮影の際にもれが生じたもの、写真が不鮮明なも

の、文献の「のど」の部分や頁の角等に文字が隠れているもの等を確認するに至った。それらについての調査、撮影のために、2023年8月22日に、西本祐攝、西尾浩二、藤井了興、山雄優生の4名で清沢満之自筆原稿を所蔵する西方寺への出張調査を行った。清沢満之記念館（西方寺境内内）2階をお借りし、所蔵文献の調査、撮影を行った。実際に撮影した文献は、17点である。これらの文献についても、上記1、2の作業を行い、西方寺所蔵文献リストの拡充をはかり、その内容を確認する研究を行った。

出張に際して、西方寺に研究内容とその進捗状況を報告し、さらに作成リストについては清沢満之記念館の展覧等の際にもご活用いただけるものであることを情報共有し、現段階の作成リストを西方寺と共有した。また、西方寺の門前にある碧南市藤井達吉現代美術館（以下、美術館と略）で開催された「碧南市制75周年記念事業 開館15周年記念 生誕160年 清沢満之の世界展」を拝観した。本研究も大谷大学から出展する清沢満之関係のものについて協力をさせていただいており、拝観の際に美術館の豆田誠路学芸員、日置麻里学芸員から協力への謝意を伝えられた。

さて、3カ年にわたり継続してきた未収録文献の研究成果として、未収録文献が有する研究上の意義については、次の4点を確認することができよう。

- 1、清沢満之の思想形成を探る資料
- 2、関係教育機関でどのような教育がなされたのかという近代日本教育史の資料
- 3、清沢満之の生涯で未確認の事績を明確にする資料
- 4、清沢満之と同時代人との未確認の交流記録

上記1、2については研究開始当初から想定していたが、3、4については、本研究の3カ年の成果として明らかにすることができた意義である。

作成したリストをどのように活用していくかについては、さらなる検討と所蔵元との協議が必要である。研究成果については、本研究所『紀要』等にて報告していきたい。

仏教写本研究

パリー語貝葉写本の研究—保存、整理、情報収集およびネットワーク構築を中心に—

研究代表者・教授 DASH Shobha Rani
(仏教学)

大谷大学には、パリー語、サンスクリット語等で書かれた仏教に関する写本が数多く所蔵されている。その一部はある程度整理され、研究されているが、未整理で研究されていないものも多く残っている。大谷大学所蔵写本の中の1900年にタイ王室から寄贈されたと思われるクメール文字、ビルマ文字とモン文字で書かれたパリー語貝葉写本群が日本最大級のものと言われる、研究者の注目を浴びる。

本研究は、これらの写本の保存、整理と利便性、そして学術研究の準備を整えることを主な目標とする。そのため、貝葉写本の高度なデジタル化、所蔵写本のデータベース構築、写本が包まれていたと思われる包み布の研究、関連資料の収集、ローマ字転写テキストや校訂本の作成、翻訳などを中心に作業を行う。そのために必要な資料を収集する。これに加えて、写本研究に基づき、南アジア・東南アジアを中心にその文字、言語、文化、信仰などの国際的・学際的な研究を行うことおよび関連資料収集、共同研究の実施および研究者・研究機関とのネットワーク構築を目指すことも目的とする。

このような目的を達成するために2023年度は以下の研究活動を実施した。

①写本の整理・ローマ字転写テキスト作成

2023年5月18日(木)～2023年5月28日(日)(個人研究5日間含む)の期間中本研究班の嘱託研究員であるSuchada Srisetthaworakul 博士をタイ国から招聘し、本学博物館においていくつかの写本の確認作業およびデータ整理を行った。2023年12月に本学の関係部署よりクメール文字の一部の貝葉写本のローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)での刊行と公開の許可が下りた。当該写本の画像データを整理し、2024年3月から文字入力、写本の内容の比較などの作業をより具体的に取り組んでいる。完成したテキストをデータとして研究者に提供する予定である。また、2024年3月2日(土)～2024年3月11日(月)までタイへ出張した(本調査出張の詳細については本『研究所報』の35ページを参照されたい)。Dhammachai Institute を訪問し、Suchada Srisetthaworakul 博士およびその他複数名のネイティブの研究者の協力を得て、当該写本の

研究作業を進めた。

②データベース構築

大谷大学所蔵東南アジアのパリー語仏教写本の詳細な目録である『大谷大学図書館所蔵 貝葉写本目録』大谷大学図書館(以下、『大谷貝葉目録』と略す)が1995年に出版されている。この目録はその当時の特別な技法と機材を用いて刊行されたが、それは現在のパソコンやソフトウェアに対応しないようである。そのため、目録のデータ入力が必要不可欠である。デジタル入力の完成後、研究の利便性を図るため、データベースを構築する。Excel で入力されているデータを見やすい形でレイアウトを作成し、検索できるようにすることの準備を継続して行っている。

そして、2023年12月に本学の関係部署より『大谷貝葉目録』の英語版のデータベースの公開の許可が下りたため、至急その実行に専念し、本格的に作業を始めた。わずか数ヶ月の作業ではあったが、使用される技術の検討などの準備は一通り終え、その英訳作業も概ね完成している状態である。2024年度内にWeb公開を予定している。

③ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究

写本研究の総合的で新たな研究及び技術・知見の集積を目的として、2021年度よりハイデルベルク大学のDepartment of Cultural and Religious History of South Asia と提携して立ち上げた「Manuscriptology and Digital Humanities」という共同研究プロジェクトのもと、国際ワークショップや研究発表会などを定期的に開催している。2023年度はZoomを用いて合計6回実施した。これによってこれまでで、合計20回の共同研究会が終了している。

○ 第1回公開講演会

題 名: Digital Epigraphy in the Project DHARMA
発表者: Annette Schmiedchen

Dániel Balogh (Humboldt University, Berlin)

○ 第2回公開講演会

題 名: National Mission for Manuscripts: Present, Past and Future

発表者: Dr. Anirban Dash (Director, National Mission for Manuscripts, New Delhi)

○ 第3回公開講演会

題 名: A New Online Tool for the Production of Critical Scholarly Editions

発表者: Dr. Rafal Felbur (Heidelberg University)

○ 第4回公開講演会

題 名：eHeritage project: Digitization of Gandharan Artefacts (DiGA)

発表者：Prof. Dr. Jessie Pons, Prof Dr. Frederik Elwert, Dr. Serena Autiero, Dr. Cristiano Moscatelli

○ 第5回公開講演会

題 名：Qalamos – Connecting Manuscript Traditions

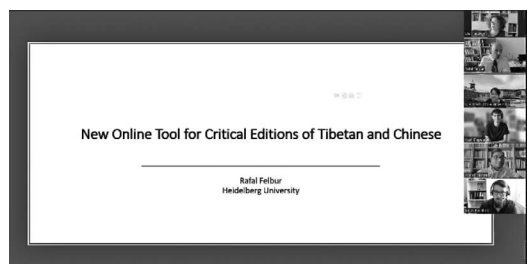
発表者：Larissa Schmid & Karin Druhes M. A.
(Orientabteilung Staatsbibliothek zu Berlin)

○ 第6回公開講演会

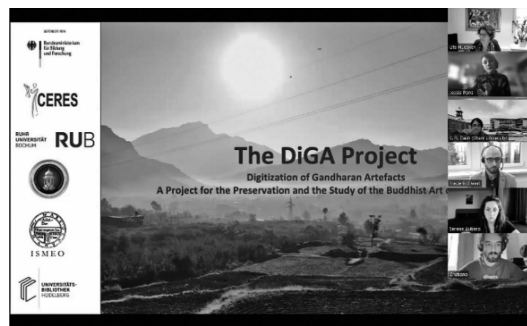
題 名：Dating the Vedic Corpus

発表者：Dr. Oliver Hellwig (University of Zurich)

これらの公開講演会の詳細について <https://www.otani.ac.jp/events/sfpjr7000001dg8f.html> (大谷大学) ; <https://www.sai.uni-heidelberg.de/krs/forschung/manuscriptology-and-digital-humanities.html> (ハイデルベルク大学) を参照されたい。



第3回公開講演会のオンライン発表の様子



第4回公開講演会のオンライン発表の様子

④資料・情報収集

タイ出張の際に本研究所の協定機関である Dhammachai Institute の協力により東南アジアの仏教写本に関する多くの情報を収集することができた。それら

の情報を今後まとめて適切な形で公開する方針である。

そして、2024年3月25日(月)に本班の戸次顕彰研究員と東京へ出張し、立正大学や東洋文庫の研究者と懇談し、今後の研究活動に力を注ぐためのお願いをした。

現在準備中である、「日本に散在しているインド学・仏教学系の写本のデータベース構築」という本班の課題について懇談をし、貴重なアドバイスを頂いた。長年仏教写本に専念している研究者として本課題はインド学仏教学の研究の基盤づくりに有意義であると言われ、その実施に関して今後協力していただけるとのことである。個人的に仏教写本の研究を行っている研究者が複数名いるものの、大学という一つの組織として仏教写本の総合的な研究を行っていることがおそらくないので、本研究班の研究活動は日本において写本を題材にした仏教研究の基盤づくりになることが期待されたとの意見を頂戴した。

⑤公開講演会

インド仏教、東南アジア仏教、及び仏教写本研究の著名な研究者である Peter SKILLING (Bhadra Rujirathat) 博士を招聘して2023年12月7日(木)に“Painting the Jātakas in Early Modern Central Thailand”という題名で対面とオンライン (Zoom) とで公開講演会を行った。詳細については本『研究所報』の25ページを参照されたい。

⑥『大谷貝葉目録』の修正

『大谷貝葉目録』は刊行から長い年月が経過しているため、その間に進展した新たな知見に基づき、随時修正しているところである。

大学史研究

大谷大学史関係資料の 収集・整理

研究代表者・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

『研究所報』No.83にも記載している通り、2023年度における研究班の目的は、従来大谷大学史資料室が取り組んできた内容を継承しつつ、大谷大学史の研究全般に寄与することである。2023年度は大学史資料室から移行した過渡的な位置づけでの研究班として真宗総合研究所主事が研究代表者となり、研究班の活動をおこなった。

2023年度の主な活動として、①所蔵資料および寄贈資料の整理、②所蔵資料・データ調査・資料貸出、③全国大学史資料協議会への参加、④大学史に関わる資料の収集・保管体制の検討、⑤特定研究班「大谷大学樹立の精神」100年との共同作業への取り組み、以上5つの内容を中心に活動した。

特に2023年度は上記の④に関して、大学史資料の多くが電子データとなっている現況をふまえ、大学史資料の収取・整理・保管および大学史研究の体制作りについて、ミーティング・情報交換を行い、大学史研究における基礎資料にかかわる課題と方向性について検討した。具体的には、元大谷大学史資料室長であるとともに大学史資料に専門的な知見を有する者2名と大学史関係資料の収集・整理と諸課題について検討する機会を設け、それらに取り組む方向性のある程度見出すことができた。また、これまで大学史資料室の実務に協力してきた真宗総合研究所の職員との情報交換を実施することができた。

上記の取り組みをふまえ、ひきつづき大学史研究における資料の収集・整理等、研究班が担うべき取り組みを着実に進めていきたい。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料の デジタル・アーカイブの構築

2023年度室長・准教授 藤元 雅文
(真宗学)

デジタル・アーカイブ資料室の主な目的は、大谷大学が所蔵する貴重な学術資産をデジタル化したデータの整理・保管および研究資料としての公開にある。2023年度の主な活動は大谷大学図書館古典籍のデータベース構築である。

大谷大学図書館所蔵古典籍の書誌学データベースについて、今年度も登録作業を進め、今年度分とこれまでの分と合計すると公開準備件数は334件となる。また、2024年4月時点での古典籍公開件数は18,875件となる。

宗教・社会研究

宗教と社会の関係をめぐる 総合的研究 ー現代社会における宗教と共生ー

研究代表者・教授 福島 栄寿
(近代日本仏教史／近代日本思想史)

はじめに

多様な価値観を内包する現代社会を生きる私たちは、様々な変化を強いられているが、宗教のあり方もまた、問われていると言えよう。本研究では、かかる問題意識に立って、現代社会において宗教が果たすべき役割やその可能性を考えることを研究課題に掲げている。その課題にアプローチすべく、本年度は、昨年度に引き続き、「現代社会における宗教と共生」をサブテーマに設定し、PD 研究員各自のディシプリンに基づく視点から課題に取り組んだ。以下、その具体的な取り組みと成果を概観したい。

1. 本研究は、主に以下の二つのアプローチから取組んでいる。①各 PD 研究員の各自のディシプリンに基づく研究課題に関する取り組み、②室長が主導し、全研究員が共同で実施する取り組み、である。

①の主な取り組みとして、(1) PD 研究員の各自の研究課題に基づく取り組み、(2) PD 研究員が、各自の研究課題の検討に関連させて、企画立案を担って実施する【公開シンポジウム】と【公開研究会】がある。2023 年度は、昨年度と同じく、各一回ずつを開催した。

(1) の活動内容については、東京分室 PD 研究員個人研究報告会を開催し、各 PD 研究員の研究課題と取り組みを報告した(2024 年 3 月 7 日 於：大谷大学響流館マルチメディア演習室で対面実施。詳細は、本所報に掲載しているのので、そちらを参照のこと)。各 PD 研究員は、所属学会や研究会での発表や招聘講演、フィールドワーク、科研費に基づく調査活動等、それぞれが研究課題に応じて、年間を通して地道かつ真摯に研究活動に取り組んでいる。この研究報告会は、各 PD 研究員が日頃の成果の一端を報告し、助言を仰ぐ大切な機会でもある。当日は、学内より一楽真学長はじめ、多数の教員、大学院生の参加があり、限られた時間であったが、闊達な質疑応答がなされた。その後の学内食堂で開催された情報交換会でも、議論は時間いっぱい止むことがなかった。

次に、(2) の取り組みについて紹介する。

【公開シンポジウム】としては、磯部美紀研究員が中心に企画立案し、開催した(2024 年 1 月 27 日

於：大谷大学響流館メディアホール。対面とオンラインのハイブリッド形式)。テーマは、「専門職による死別をめぐる実践ー個人化社会の共同性ー」である(詳細は、本所報掲載の報告を参照のこと)。本シンポジウムでは、医師や宗教者による実践に焦点をあて、死別現場の現状や課題、葛藤をめぐる諸報告を通して、死との向き合い方を共に模索する関係性の構築について議論を深めるものであった。地縁や血縁が希薄化する現代社会において、いかに人々は死別に伴う感情と向き合うことができるのか。医師・僧侶・宗教学者と、登壇者によっては複数の専門的立場から死別の現場に携わってこられた方々の報告は、いずれも重要な内容であった。死別をめぐってグリーフケアや臨床宗教師の重要性に着目した本シンポジウムは、本研究の課題である、現代社会において宗教が果たす役割を考える上で、非常に示唆的かつ実り多いものとなった。

【公開研究会】としては、陳宣肆研究員が中心に企画立案し、開催した(2024 年 3 月 10 日)。テーマは「赤ちゃんを失う悲しみと向き合うー医療・宗教・社会ー」である(詳細は、本所報掲載の報告を参照のこと)。会場は東京都内御茶ノ水駅最寄りのオフィスビル内会議室で、対面とオンラインのハイブリッド形式で実施した。東京都内の会場で東京分室主催のイベントは初めての試みであったが、想定以上の参加者があり、設定されたテーマへの関心の高さを、強く認識させられた。

本研究会の開催趣旨は、流産、死産、人工妊娠中絶、新生児死亡といった周産期喪失における悲しみについて、医療、宗教、社会の三側面を通して現状とその悲しみへの向き合い方を考えることであった。赤ちゃんを失った両親の多くは、出産の医療化、核家族化、共同体の崩壊等、現代社会の様々な特徴を背景に、表出しにくい悲しみやつらさを抱えている。

実際に医療現場でスタッフとしてケアに携わる看護師・臨床心理士・僧侶・助産師・大学教員と、報告者によっては複数の専門的立場から行われた報告内容は、いずれも本研究会のテーマを深めるものとなった。グリーフケア等、周産期喪失をめぐる悲しみへのケアやサポートがいかに重要で、丁寧さと繊細さが求められるものであるかを考えさせられた。

本研究会へのオンライン参加者からは、自らの周産期喪失の体験を踏まえた感想も寄せられた。また、かかるテーマによる公開研究会が様々な場所で開催されることを期待する声もあった。このような公開研究会の試みによって、いわば「公認されない悲嘆」に伴う悲しみへのケアの必要性が、広く社会に認知される契機にもなり得るだろう。たとえ小さくとも、東京分室

の取り組みが、社会に問題を提起し、時には波紋を投げかけていく、そんなポテンシャルがあることを実感できた公開研究会となった。

その他、PD 研究員が新たに立案企画した取り組みとして、真宗大谷派親鸞仏教センター所長の本多弘之先生と PD 研究員の研究交流会を開催した(2023 年 12 月 11 日、詳細は本所報掲載の報告を参照のこと)。親鸞仏教センターとの情報交換や、研究会等を通じての交流については、予てからその機会を切望していたが、本多先生と親鸞仏教センターのご協力の下、開催することができた。この場をお借りして御礼申上げる。

研究交流会では、PD 研究員各自の研究課題について自己紹介を兼ねて報告し、本多先生から、それぞれについてコメントをいただくことができた。

東京分室は、PD 研究員がそれぞれの自覚に応じて、各自が研鑽に励む場であるが、時には、もがき苦しむ時もあるだろう。何と言っても、本多先生をはじめ、親鸞仏教センターの存在は、心強い。親鸞仏教センターは、長年、東京において情報収集と発信等、多彩な活動を展開されている。研究交流会に留まらず、形式は何であれ、今後とも情報交換と交流が継続されることが望ましいであろう。

2. 次に、②室長が主導し、全研究員が共同で実施する取り組み、について述べる。指定研究の研究課題を検討することを目的として、昨年度に引き続き、2023 年度も、現代沖縄における宗教事情をテーマに取り上げ、全研究員が参加して沖縄への現地調査を実施した(2023 年 10 月 28 日～31 日。調査内容の詳細は、本所報掲載の報告を参照のこと)。

宗教関連施設として、昨年度は、東西真宗両派の別院、キリスト教教会を訪れたが、2023 年度は、特に真宗以外の仏教寺院における宗教活動の調査を念頭に、臨済宗の達磨峰西来院、浄土宗の楽邦寺、天台宗の地藏院を訪れた。事前学習を通して想定はしていたが、民間宗教者のユタや沖縄の伝統宗教との関係性は多様であり、寺院毎にそれらとの関係の濃淡に違いがあることを実感することができた。いずれも沖縄出身の住職が営む寺院であったが、寺院毎に異なる立地場所や建立の経緯や由緒に加え、歴代住職の民間宗教への向き合い方が、各寺院の特徴の形成に結びついていることが理解できた。

加えて今回の調査では、沖縄の在家出身で僧侶となった岸本雄志氏(東本願寺沖縄別院法務員)と知花一昌氏(読谷村に何我寺を開く)に聞き取り調査を実施した。世代もライフヒストリーも全く異なるお二人が、大谷派の僧侶との出遇いを縁とし、さらに真宗の

教えを学ぶことを志したという話が大変印象的であった。

また、最後に訪れた仏壇・仏具を扱う照屋漆器店では、照屋慎氏にお話を伺った。照屋氏は、日頃から沖縄の伝統的な宗教文化を守っていく上で、寺院、僧侶、葬儀社に加えて、仏壇業者の役割が重要であるという自負を持っているという。そのため、僧侶の勤めもあり、仏具類の購入に訪れたお客に、仏壇・仏具の役割や意義について語りかけて、販売している。家のつながりを中心に営まれてきた沖縄の宗教文化の象徴的な存在が仏壇である。

コロナ禍以降、本土では家族葬が広まり葬儀の簡素化が進んでいるが、沖縄も例外ではない。沖縄地方紙の「お悔み」欄には、時には告別式同日に、初七日法要から四十九日法要まで繰り上げて執り行うことが告げられている。こうした傾向は、コロナ禍で急速に広まったようだ。そうした新聞の「お悔み」欄には、多くの親戚縁者が集まる沖縄の葬儀文化が現代の社会状況に合わせて変化していくありようが映し出されている。今回の調査で得られた、非常に重要な視点である。

おわりに

2 年間の任期を終えるにあたり、一言、感想めいたことを記しておきたい。

東京分室は、公開シンポジウムや公開研究会で研究成果や取り組みを発信することを通じて、現代人が何を問い、何を求めているかを認知するための、いわばアンテナの役割を果たせるのではないか。ひいては、得られた情報をフィードバックすることで、真宗総合研究所の研究活動にも活かすことが可能となろう。今後とも、各 PD 研究員がそれぞれの「感度」を鍛えながら、東京分室の役割の可能性を模索していくことを期待したい。

加えて東京分室は、PD 研究員が各自の研究活動を通して、様々な刺激を得ながら鍛えられる場所でもある。シンポジウム等の企画立案に際しても、徐々に調整力や交渉力が養われていく。研究成果報告会や研究会等での質疑応答についても、場数を踏むことでより確かな応答も可能となるだろう。こうした研究者として身につけるべき力は、東京分室という厳しくも恵まれた場であるがゆえに、知らず知らずに鍛えられる力なのではなかろうか。PD 研究員の皆さんの益々の活躍と、東京分室が、これからも多くの若手研究者が集い、育つ場であり続けることを心から願ってやまない。

2023(令和5)年度東京分室 PD 研究員個人研究成果報告

東京分室 PD 個人研究

宗教及び胎児生命観の変容 についての日台比較研究

研究代表者・元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿
(宗教学)

本研究は現代社会において宗教がいかに胎児生命観の変遷に対応するかを検討するものである。特に日本と台湾の状況に焦点を当て、両者のつながりと関係性を意識しながら、比較研究を行った。過年度の研究方針を継承し、報告者は2023年度において、(1)台湾仏教と民間信仰における胎児生命観、(2)台湾における胎児生命尊重運動の二つの軸を通して研究を進んできた。以下はそれぞれの成果を提示していく。

(1) 台湾仏教と民間信仰における胎児生命観

台湾において、流産、死産や生まれて間もなく亡くなった胎児や夭逝した赤子の霊は「嬰霊」(yingling)と呼ばれる。「嬰霊」という言葉の歴史は長いとはいえず、おおよそ1980年代中盤から使われるようになった。その言葉が台湾社会に広がったきっかけは、1980年代末にある仏教系出版社が複数の新聞紙で広告を掲載することである。広告によって、嬰霊という言葉とその概念が広がった一方、広告の内容及び中絶の崇りを強調する言説、及び大藏經に収録されていない『長寿滅罪護諸童子陀羅尼經』の使用が批判的となった。特に仏教系の雑誌で論戦が繰り広げられた。そして、筆戦に止まらず、両者の間にはさらに訴訟及び訴訟結果に対するデモ活動が生じた。上記の事件の経緯や詳細は、報告者が昨年度に上梓した単著『「水子供養」の日台比較研究－死者救済儀礼の創造と再構築－』(晃洋書房 2023年2月28日)に報告されている。この成果をさらに深め、2023年度において報告者はこの事件を通して台湾仏教における胎児生命観を検討しようと試みた。報告者はまず『仏説胞胎經』、『仏為阿難説処胎会』、『大宝積經』の「仏説入胎藏会」といった仏教經典における胎児発生論を検討し、そして事件以降、台湾の仏教団体が「嬰霊」概念の受容と拒絶の様相を提示した。上記の成果は研究発表、「台湾仏教と胎児生命をめぐる初歩的論考——1980年代末の慈悲精舎事件を手がかりに——」(日本民俗学会第75回年会、2023年10月22日、成城大学)、『「嬰霊信仰」の日台比較研究：家庭結構變遷與宗教儀式的

重組」(佛教教學工作坊02、2023年12月28日、佛光大學)に提示している。

また、報告者は台湾の産育習俗における胎児の位置付けを検討した。報告者はまず清代から日本統治時代で台湾の民間に流布する妊娠過程を描く「十月花胎歌」の内容を分析し、その後流産、死産及び異常出産の原因とされてきた「胎神」信仰の現代的意義を検討した。上記の内容は、「現代台湾における胎児の『死』をめぐる宗教実践」(国際日本文化研究センター、第4回共同研究会 2024年2月17日)に発表している。

(2) 台湾における胎児の生命尊重運動の動向

人工妊娠中絶(以下は「中絶」)をめぐる法律面ないし政治面の論争は、公共的な場で胎児の生命への考え方の一側面を示している。2023年度、報告者は台湾における胎児生命尊重運動の調査を継続し、参加する団体の繋がり及び宗教との関わりについて調査を行った。中でも特にカトリック教団の動向に焦点を当てている。台湾におけるカトリック教会は、1980年代初頭および2000年代中盤の2回に渡って、胎児の生命尊重を唱え、政府に法律の改定を要請した。1980年代の初頭について、「中國天主教文化協會」が主導的な役割を担っている。特に胎児の生命尊重を中華文化と道徳が結びつけられる傾向が見える。そして、2000年代以降は、カトリックの呼びかけで結成した「尊重生命全民運動大聯盟」は優生保健法の修正を呼びかけていたが、最終的に失敗に終わった。しかし、これをきっかけに、女性の権利を主張する団体との対立が注目されるようになった。上記の研究成果は、「台湾における胎児生命尊重運動の展開——カトリック系プロライフ団体の動きを軸に——」(日本台湾学会第25回学術大会、2023年5月28日、日本台湾学会)で報告した。

東京分室 PD 個人研究

現代日本における葬送儀礼と
僧侶に関する研究
— 一首都圏の事例を中心に —研究代表者・東京分室 PD 研究員 磯部 美紀
(社会学)

本研究の目的は、現代日本の葬儀に僧侶が関与する意味はいかに見出されるのかを宗教社会学的な観点から明らかにすることである。本研究を遂行する上で注目すべきは死別悲嘆である。死別悲嘆をめぐる研究では近年、死者と遺族の関係を再構築し、死者と遺族のつながりを重視することに重きが置かれている。

2023年度は、死者と遺族の関係性再構築を促すナラティブに焦点をあて、僧侶が葬儀の法話において、死者をどのような存在として捉え、いかなるものとして言及しているのかについて、浄土真宗の僧侶への聞き取り調査の結果をもとに検討してきた。研究対象者は、岐阜県西濃地域 A・B 寺住職と千葉県佐倉市 R 寺住職の3名である。なお、分析の過程では、千葉県北総地域周辺の子供葬業者を対象に行ったアンケート調査のデータも補足的に用いた。以下では、その概要を示す。

まずは、各僧侶による死者の言及の仕方を確認していく。R 寺住職は死者について、「諸仏」「お釈迦様の弟子」として、遺族に対して、阿弥陀仏による「教え、願い」、「人生を生きるための教えや願いを……届けてくださる」存在として言及する。A 寺住職は、死者は遺族を「仏さまに導いてくださる案内役」とであると示す。B 寺住職は死者について、生前のかかわりを通して遺族の現在のあり方にも影響を与え、さらに、遺族が「お念仏」に「出遇う」縁をつくる存在であると指摘する。こうした真宗僧侶の語りによって浮かび上がるのは、生者によって弔われるのみの死者像に留まらない、むしろ生者の側に影響を及ぼすような死者の姿である。ここでの死者は、死別後もなお生きていかねばならない遺族に対して、自らの死を通して生きていくことの意味を示す存在として言及されている。また死者は、生前に遺族と交流することによって遺族の過去に影響を及ぼすのみならず、その経験は今の遺族の一部を構成しているとみるならば、遺族の現在にもかかわっていると解釈できる。法話に着目することで、僧侶は死者について、遺族の過去・未来・現在にかかわる存在として言及していることが明らかになった。

また葬儀における法話は、死者と遺族の関係性再構

築を促すナラティブを人々に提供する機会と見なせる。先行研究に示されるように、ナラティブとは、第一に橋をかける行為であり、関係づける作用のことを表す。関係づける上では表現の仕方が重要である。同じ内容を伝えるにしても、理路整然と伝えるのか、あるいは情緒的に伝えるのかで、相手が受ける印象は異なったものになる。葬儀における法話では、死というシビアナ事実に対峙する中で、一方では逸話を交えながら、物語的に語ることになる。他方で、説得的に、論理的に言い切る場面もまた、法話の一要素として必要とされる。論理的な考え方を手がかりにすることで、かけがえのない人の死を受容する上でのひとつの見方が立ち現れるのである。法話は、この両者を織り交ぜることにより成立していると考えられる。ナラティブとは第二に、今・ここで構築されていく生ものである。語り手と聞き手の相互行為の結果として生み出される。S 葬儀社社員が語るように、聞き手の状況を顧みない長時間にわたる法話は、聞き手に対して耳を傾けるという行為を諦めさせる。葬儀における法話は、語り手である僧侶と聞き手である遺族および参列者、さらには死者の存在に影響を受けながら、葬儀の時空間で構築されていくものとして捉えられる。B 寺住職の事例からは、法話の内容は、死者や遺族との対面経験の有無（≒月参りの有無）に影響を受けることが示された。葬儀では総じて法名の意味については言及するものの、死者の人となりに言及するかどうかは、死者や遺族のことをどの程度知っているのかに左右される。また、R 寺住職の事例からは、遺族からの問いかけ（生前の行いが悪かった者が仏弟子になれるのか？）によって、僧侶自身の教義理解が揺るがされ、再考を迫られる様子が見えてくる。葬儀における法話は、その前後関係も含めて見てみると、生ものとしての側面を持つことが分かる。葬儀という現場で今まさに形づくられていく、生の言葉によって伝えられるものであることから、実際の口調や、誰によって発される言葉なのかが重要になる。このように葬儀の法話は、語り手である僧侶と聞き手である遺族と参列者、さらには死者の存在に影響を受けながら、葬儀の時空間で構築されていくものとして捉えられることが指摘できる。

今後の課題は、他宗派の僧侶による法話実践に着目することにより、上記の結果と比較検討を行っていくことである。

東京分室 PD 個人研究

中国仏教における不退転の 概念内容の解明

研究代表者・東京分室 PD 研究員 澤崎 瑞央
(仏教学)

本研究は、大乘仏教において仏と成る道程から退くことがない段階と考えられる「不退転」を主な研究対象としている。とりわけそのような段階が求められた思想背景と、いかなる思想的根拠によって「不退転」の概念が構築されているかを主な問いとして、その概念内容の解明を目的としている。

仏教における理想的人間像といえば「ブッダ」その人を指すが、大乘経典ではそのような「ブッダ=仏」に成ることが確定した行者を「正定聚」や「不退転」という修道的段階を表す語句で示してきた。特に「般若経典」では、仏に成ろうと志す者を「菩薩」と呼び、さらに、『大智度論』では本当の菩薩とは不退転の菩薩であると明示している。このことから、「不退転」とは、大乘仏教徒が目指す仏への道程において、初めに目標に掲げられる段階であり、ある種の目指すべき理想の人間像を示していると考えられる。この「不退転」の語は、多くの大乘経典に用いられており、特に浄土経典においては、極楽浄土への往生と緊密に関連して説かれている。

しかし、なぜこのような段階が求められたのか、また、どのような思想的根拠の基に二度と仏と成る道程から退かないという理論が構築されているのかについては研究の余地を残している。その要因には、主にこの語句が総じて十分な説明がなされずに用いられることや、様々な教義概念と関連して示されることに加えて、一見すると現実には到達不可能な段階のようにおもわれることが挙げられる。さらには、初期経典から用いられてきた「正定聚」といかなる違いがあるのかという点にも注目される。そこで、本研究では、「般若経典」に関する最古の注釈書であり、東アジア仏教に多大な影響を与えた『大智度論』を主な対象として、「不退転」の概念内容を体系的に解明することを試みている。

これまでの研究では、見仏の三昧である「般舟三昧」、成仏の予言である「授記」、そして空の思想とも密接に関連し、法の無生という智慧を備える「無生法忍」など不退転の思想的関係を考察してきた。これらの研究成果から、『大智度論』に示される不退転とは仏と成る過程から退くことがない思想的根拠として、「仏とは何か」、また「真の仏説とは何か」という

課題が解決された状態と仮定された。本当の仏および仏説とは何か、という仏教徒の根幹にかかわる問題の解決が、いかなる外的内的影響にも左右されなくなることに緊密に関連していると考えられるためである。

上記の仮定を基に、今年度の研究では、「神通力」と「往生」について検証考察し発表したことを報告する。今年度の発表題目は以下の三つ、①「菩薩の修道過程における神通力の位置づけ——『大智度論』に焦点を当てて——」、②「『大智度論』における往生と不退転」、そして③「『大智度論』「往生品」を読む」である。

まず①では、『大智度論』において、超人的な力と考えられる「神通力」を仏と成ることを志す仏教徒が備えることに、どのような意義を見出しているかに着目した。『大智度論』では、無仏の時代において、「ことば」という文化的状況に位相を移す力として仏の神通力が示されている。本報告で重視したのは、そのような仏の神通力と菩薩や仏教徒が身に着ける神通力の関係性である。結論として、菩薩に神通力が求められる要因は、衆生を対象とした神通力を用いた仏の教化方法（ことば）に起因していると解釈されていた。したがって、菩薩が仏と成るには、そのような神通力の獲得が不可欠となる。

②と③に関しては、「般若経典」では、最初期から「どのような死生観をもって修道過程を歩むべきか」という問題意識が表れていたことに着目し、往生と不退転の関係を検討考察した。ただ『大智度論』の場合、往生とは必ずしも阿弥陀仏の極楽浄土へ往生生まれることを意味しない。天や諸仏の仏国土に生まれ変わることに加えて、生まれ変わりそのものもまた往生として示されていることには注意が必要である。このような往生の用例を検証すると、『大智度論』では、仏法に触れそして仏弟子となった者は、実は皆な過去世において仏法に出会い、そして往生してきた者と解釈されていると考えられる。加えて、無仏の世においても仏法を聞き受持する者も同様に往生してきたも者とされている。このような用例の検証から、『大智度論』では、仏法に出会った者の生まれを「往生」とみなしていることが明らかになった。

①は『印度学仏教学研究』72巻1号に、②は第72回「仏教史学会」、③は「科学と仏教思想」研究会において発表し、論文掲載を予定している。

東京分室 PD 個人研究

浄土真宗の古典に示される
理念の研究研究代表者・東京分室 PD 研究員 鶴留 正智
(真宗学)

本研究は浄土真宗の古典、特に『歎異抄』と『教行信証』に示される「(宗教的) 理念」がいかなるものであるかを明らかにすることを目的としている。「浄土真宗」ということばのうちには浄土の教えを真実の宗(ムネ)とするという意味が込められているから、そこに仏道のムネ(中心)を明らかにしようとする意志を読みとることができる。「浄土真宗」を教団を指す語としてだけでなく、いまの意味において解釈するならば、そこには「中心」としての理念的な概念を描定することもできよう。したがって、浄土真宗の理念を明らかにすることはまさに浄土真宗が何であるかを明晰にすることであり、真宗学の共通目的の一つである。その方法として採用されるのもまた浄土真宗において「聖典」の位置づけをもつ古典の読解であって、基本的には伝統的な真宗学を踏襲することになる。

しかしながら、そもそも真宗学とは何であろうか。本研究はまず、このような素朴な問いに出発し、代表的な真宗学の先達である妙音院了祥にフォーカスして研究を進めることとした。

了祥にフォーカスする理由は単純で、氏が『歎異抄』の解釈史において最も注目され、言及される名であるからにはほかならない。氏の業績として特に著名であるのは『歎異抄』の著者議論であり、『歎異抄』の著者を河和田の唯円と明らかにした功績がよく言及される。

一方で、了祥の研究がいかに受容され、またいかに形成され、変遷したかについての調査は、必ずしも十分なものがあるとはいいがたい。したがって、本年度の研究は、了祥の研究の内容と意義とをより判然とさせることを目指し、それによって、どのように「理念」の研究を進めるべきかの指針を得ようとした。

まず了祥が受容されるにあたって明らかにされるべきは、了祥『歎異抄聞記』の出版前後の状況であろう。これについては、明らかに東京の宗門内部における『歎異抄』ブームが背景にあると言える。というのは、了祥の聞記が出版される1908年に先立って、1903年頃から暁烏敏、近角常観などが東京において『歎異抄』を用いた活動を行っており、また南條文雄も『歎異抄』についての本を書くなど、明らかに『歎

異抄』への言及が盛んになっていることが注目される。『歎異抄聞記』の下となった了祥の講義は1841-42であるから、60年以上の時間を経て、東京の宗門人を中心とした『歎異抄』ブームの影響によって出版されたのである。

しかしながら、必ずしもこれに肯定的な評価が下されたわけではない。1910年出版の蓮元慈広『歎異抄講義』(大谷派安居の次講)では、了祥が如信説を否定することが「法主」の権威を否定し、また深励の権威を否定するものであるとして、『歎異抄聞記』を強く批判する。この蓮元の講義からは『歎異抄聞記』が読まれるようになりつつも、なおそれを受容すべきかどうかには議論があったことを知ることができる。今日のように肯定的に受容されるようになるのは、1922年の梅原眞隆、1931年の金子大榮、1941年の多屋頼俊、1942年の曾我量深の言及が代表的であり、ここに受容の定着を見ることができる。

ところで、了祥の『歎異抄』講義は、大きく前期と後期に分けることができる。前期は、国学の知見を活用するなどの点で従来の宗学からの進展を見ることができるものの、基本的な解釈は深励と差がないと言える。一方、後期の講義は非常に斬新かつ説得力ある議論を提示している。これは、あくまで文法と論理に忠実にテキストを読解した成果であろう。

今回、了祥の解釈の内容と、その受容の変遷について明らかになったことは、彼の独創性であり、また改めて確かめられた真宗学の方向である。彼の独創性は、親鸞と親鸞の著述を意味する「宗義」と、覚如から近世に至るまでの解釈の歴史としての「宗学」を明確に区別する、「近代教学」と共通するものである。了祥は、テキスト自体の文法と論理に即した解釈を行うことで、「近代教学」的な解釈を歴史上の「近代教学」に先立って行っていたのであり、その意味で、了祥の『歎異抄』講義は真宗学における画期的なできごとであった。

同時に、近現代における意義ある真宗学もまた、単に先学の教えを引きつぐだけでなく、文法と論理に即した真宗学にはかならないように思われる。

以上の了祥に関する研究は日本宗教学会の第82回学術大会においても報告を行った。

今後の研究もまた、『歎異抄』、『教行信証』を文法的、論理的に明らかにしていく必要があるだろうから、このような観点からさらに研究を進める予定である。

公開シンポジウム報告(2023. 10. 1～2024. 3. 31)

国際シンポジウム「世界の宗教的伝統における さとりと知恵と変容」開催報告

国際仏教研究 研究員・准教授 Michael J. Conway

2023年12月15日(金)から17日(日)にかけて、「Enlightenment, Wisdom, and Transformation in the World's Religious Traditions (世界の宗教的伝統におけるさとりと知恵と変容)」というテーマのもと、国際シンポジウムが、国際仏教研究班の主催で本学を会場に開催された。国内外から、様々な宗教的伝統を対象として研究に取り組んでいる学者を招聘して、それぞれの伝統において知恵やさとりが如何に理解されているかということ共有することを通して、諸宗教間の理解を深めたとともに、参加者の間では諸宗教間の共通点と相違点について考える重要な機会となった。

今回の国際シンポジウムは、ハンガリーの学術協定校エトヴェシ・ロラード大学(ELTE)との共催で行われ、2008年に協定を結んでから4回目の共同開催シンポジウムとなったが、最初の3回のシンポジウムがほとんど両機関に所属している仏教研究者の発表に限られていたのに対して、今回は、研究対象と所属機関を広げ、世界の諸宗教を研究している国内外の研究者に発表をいただいた。

このテーマで国際シンポジウムを開催することになった背景に、本学が2017年度から、研究ブランディング事業として、「人間学」の取組が採択されたことがある。当初の予定では、その助成事業の最終年度において成果発表の場として企画され始めたが、文科省の役員の不正による助成プログラムの早期打ち消し、そして新型コロナウイルス感染症によるパンデミックの影響を受けて、開催が困難となり、ようやく2023年の12月に催すことができた。

シンポジウムは、響流館3階のメディアホールを発表会場として行われ、3日間を通して、計8セッションが開催された。それぞれのセッションには、約3名の発表者と1名のコメンテーターが登壇した。それぞれのセッションは約2時間の設定で、1人の発表時間は30分で、コメンテーターは約10分のコメントの末、参加者からの質疑応答が行われた。

各セッションの登壇者名(所属)と発表題目は以下の通りである。

セッション①(12月15日午前)

- (1) Who invented enlightenment? Ferenc Ruzsa (Eötvös Loránd University)
- (2) Self-Understanding, Selfless Action and Transformation Godabarisha Mishra (Nalanda International University)
- (3) GLADDENING LIGHT: Wisdom as folly, theophany, inebriation and transfiguration Thomas Plant (Rikkyo University)

コメント Michael Pye (Philipps-Universität Marburg)

セッション②(12月15日午後)

- (1) Jesus Christ as the Incarnate Wisdom of God 角田佑一 (Sophia University)
- (2) "Wisdom" in East Asian Mahayana Buddhism Paul Swanson (Nanzan University)
- (3) Enlightenment, Wisdom, and Transformation in Islam Mark Sedgwick (Aarhus University)

コメント Domingos Sousa (Nanzan University)

セッション③(12月16日午前)

- (1) Remaining in Suffering and Walking Ahead: The Shift in the Meaning of Life in Buddhism 箕浦暁雄 (Otani University)
- (2) The Wisdom to Become Buddhist: Arguments for Lay Conversion in Late Antique Indian Buddhist Homiletics Péter Szántó (Eötvös Loránd University)

コメント 木越康 (Otani University)

セッション④(12月16日午後)

- (1) Enlightenment through meditation in 20th century Buddhist and Christian thought Péter Boros (Eötvös Loránd University)
- (2) Light, Visions, and the Name: Medieval Japanese Pure Land Approaches to the True Nature of Reality 那須英勝 (Ryukoku University)
- (3) Shinran's Understanding of the Pure Land as "The Land of Immeasurable Light" Michael Conway (Otani University)

コメント James Heisig (Nanzan University)

セッション5 (12月16日午後)

(1) The place of mystical wisdom in Judaism: The controversy between M. Buber and G. Scholem 小野文生 (Doshisha University)

(2) The Emergence of the “Human Buddha” in the Nineteenth Century Europe and the Prejudice of the Enlightenment: Focusing on Ozeray and Burnouf 新田智通 (Otani University)

(3) Unbreaking the Broken Commandment: A Buddhist Reading of Hakai 阿満道尋 (Otani University)

コメント 藤枝真 (Otani University)

セッション6 (12月17日午後)

(1) The Enlightenment and Transformation of King Ajātaśatru according to the Mahāyāna *Mahāparinirvāṇa sūtra* 井上尚実 (Otani University)

(2) To discipline or to forget: The idea of the self and ethical conduct in Sufism and Zen through the writings of al-Ghazālī and Dōgen 矢崎早枝子 (University of Glasgow)

(3) “You are ‘gods’; you are all sons of the Most High.” [Ps. 82.6] : Deification and Perfection in Medieval Mystical Thought Louise Nelstrop (University of Oxford)

コメント Tonaga Yasushi 東長靖 (Kyoto University)

セッション7 (12月17日午後)

(1) Versatile Samantabhadra: The Many Forms of Fugen Bosatsu in Japan Mónika Kiss (Eötvös Loránd University)

(2) “Illumination Wisdom” for Achieving Enlightenment in the Book of *Red Wisdom* by Suhrawardi Sepideh Afrashteh (Otani University)

(3) Enlightenment and its Path: The Tantric Way of the Bodhisattva Avalokitesvara Cult in Tibetan Buddhism Shen Weirong 沈衛榮 (Jinghua University)

コメント Robert Rhodes (Otani University)

セッション8 (12月17日午後)

(1) The Process of Enlightenment in Yogācāra and Huayan Buddhism Imre Hamar (Eötvös Loránd University)

コメント Dake Mitsuya 嵩満也 (Ryukoku University)

以上の形で、21名が研究発表を行い、それに対して、8名のコメンテーターが応答した。各セッションの最後には活発な質疑応答が行われ、相互理解が種々

に深められた。

15日の夕方に、基調講演として、長谷正當（京都大学名誉教授）が「親鸞の往生理解－「正定聚」とは何か－」という題で、1時間ほど話された。講演は日本語で行われたが、その全文の英訳が配布され、すべての参加者が、その内容に触れることができるようにした。

研究発表の場での研究交流が行われたのみならず、昼食会場や懇談会会場においても、活発な議論が展開され、参加者が関係を築き、今後の研究協力のための重要な絆が生まれたように見受けられる。各日には、響流館の演習室には昼食会場が設けられ、また15日と17日の晩には、慶閑館4階のマルチスペースに懇談会の会場が設けられ、参加者が情報交換とともに親睦を深めていた。また、16日の晩には、遠方から来られた登壇者が泊まっていた京都からすまホテルにても懇談会を行うことができた。パンデミック発生以降に、ようやくそれ以前と同様な交流会を行うことができたことは非常にありがたく感じられたと同時に、共通理解を構築するために、研究発表以外の場での研究者の交流の大切さも改めて感じられた。

日本語で行われた長谷先生の講演では最も多くの参加者が見られたが、本学の学生を始めとして、登壇者以外の参加者も多く来られた。3日間には、約100名が会場に足を踏み入れ、取り上げていたテーマについて考える重要な機会となった。

今後、成果出版に向けて、参加者への原稿提出依頼を行っていく予定である。

公開シンポジウム開催報告「専門職による死別をめぐる実践－個人化社会の共同性－」

元東京分室長・教授 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿

東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央・鶴留 正智

2024年1月27日(土)に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、公開シンポジウム「専門職による死別をめぐる実践－個人化社会の共同性－」を、大谷大学響流館3階メディアホールを会場に、オンライン（Zoom）を併用したハイブリッド形式で開催した。

かつて地縁や血縁による共同体によって共有されていた死別の悲しみは、近年、個々人の経験になりつつある。こうした状況は、死にゆく人や遺された人々の不安や孤独、負担を大きくしかねない。死に伴う感情に人々が自ら対処することを迫られるなかで、専門職によるサポートが求められる傾向がある。なかでも、宗教者や医師の担う役割は注目に値する。死の前後の過程に関与する宗教者と医師は、専門的知識を有するだけではなく、地縁や血縁とは異なるつながりを生み出すことがある。本シンポジウムでは、医師や宗教者による実践に焦点をあて、死別現場の現状や課題、葛藤を報告することを通じて、死との向き合い方を共に模索する関係性はいかに構築されるのかを検討した。

発表者（肩書きは当時）とタイトルは以下の通りである。磯部美紀（東京分室 PD 研究員）「個人化社会における死別をめぐる様相」、沼口諭氏（医療法人徳養会沼口医院理事長／日本臨床宗教師会副会長）「看取り前後の死別現場における医療・介護従事者と宗教者の協働」、長谷暢氏（東本願寺沖繩別院輪番）「死別悲嘆する人々の出会い」、井口真紀子氏（祐ホームクリニック大崎院長／上智大学グリーンケア研究所客員研究員）「看取りをめぐる共同性－在宅医のインタビュー調査から」。四名の発表を受けて、後藤晴子氏（大谷大学社会学部現代社会学科専任講師）がコメントを行い、その後、参加者を交えて質疑応答を実施した。全体の司会は鶴留正智（東京分室 PD 研究員）、質疑の司会は磯部が担当した。当日の発表内容とコメントの概要は以下に示す通りである。

磯部はまず、本シンポジウムの趣旨説明を兼ねて、現代日本における死別を取り巻く状況について、医師や宗教者の位置づけに注目しながら整理した。前述の通り、死に伴う感情に人々が自ら対処することを迫られるなかで、死別現場に身を置く医師や宗教者の実践

は注目に値する。死の前後の過程に関与する医師と宗教者は、専門的知識を有するだけではなく、地縁や血縁とは異なるつながりを生み出しうるアクターとして捉えられることを示した。次に、事例研究をもとに僧侶による葬儀実践の現状を明らかにした。沖縄の事例からは、葬儀社社員への聞き取り調査をもとに、葬儀の場で僧侶に期待される役割として、厳粛に儀式を執り行うことで遺族を安心させることと、遺族の心情に寄り添いながら言葉を尽くすことの2つがあることを示した。また新潟の事例からは、僧侶が2つの顔（宗教者／生身の人間）の間で葛藤する様子、さらに葬儀における「法話」に注目することで個々人の死別経験を共同化していく糸口を探った。

長谷氏は、2010年に設立された真宗大谷派・東本願寺沖繩別院の取り組みとして始まったグリーンワークについて、「個人化社会の共同性」を考える手がかりとして紹介した。当別院のグリーンワークは、仏典童話の『けしの種』をモチーフにしており、死別体験後の悲嘆を経験する人々同士が出会い、それぞれが悲しみを抱えて生きることに希望が見いだせることを期して開催されている。深い悲嘆にある遺族は、時には周りから異質な存在となりやすく、孤立するか、その悲しみを隠す傾向がある。さらに沖縄でもコロナを機に葬儀や法事がますます簡素化され、死者を中心とした行事が少なくなり、死別悲嘆を経験した人と出会う機会が少なくなっている。当グリーンケアへの参加者の多くは、他では故人のことを話さない人が多い。長谷氏は滋賀県北部に所在する真宗大谷派寺院の住職も兼ねていることから、仏教信仰が篤く、共同体意識の強い地域の様子との比較を通じて、沖縄の特徴にも言及した。また死別に関して語る場、「泣く」ことが容易な場面が少なくなる社会の中で、グリーンケア・ワークは、仏教儀式的「中陰」などの行事の意義を再認識する機会となることが指摘された。

沼口氏は、外来診療や在宅医療を行う開業医と真宗大谷派の僧侶という2つの視点で、臨床宗教師を含む医療・介護チームで看取り前後の死別現場にかかわってきた。地域包括ケアシステムケアの中では在宅医療

が患者視点の「生活を支える医療」として機能してきた。現在社会において、がんや認知症などの疾患以外にも独居や貧困などの問題、地震や感染症などの天災や人災など身近に溢れる多くの苦悩を抱えた地域の人々に対して、スピリチュアルケアやグリーフケアの重要性が認識されはじめた。沼口医院で展開される在宅型ホスピス（メディカルシェアハウス・アミターバ）における看取り前から看取り後までの多職種による活動（医療版 SNS を利用した連携や湯灌などのエンゼルケア、遺族とスタッフで行うお別れ会や偲ぶ会、遺族により語る会、スタッフによるグリーフケアミーティングやデスカンファレンスなど）を紹介した。これらを通じて、布教・伝道を行わない臨床宗教師としての関わりから宗教者の存在意義と、これから期待されるコンパッション都市における宗教者の役割について考察した。

井口氏は、現在国内で推進されている在宅医療に関わる医師の死生観を研究テーマとしており、本シンポジウムでは医師／死生観の研究者という立場から、研究内容をもとに話題提供を行った。まず在宅医の死生観に対して島藺（2012）、浮ヶ谷（2014）などを手掛かりとした分析図式を提示し、在宅医の死生観が単に医学的合理性の追求から生活世界の論理へ、さらに人の力を超えた領域への感性へと多層化してゆくことを示した。そして、個人化社会の中での共同性を考えるという本シンポジウムの趣旨に照らし、人の力を超えた領域への広がりをもつ医師の語りを紹介した。地元で長く開業し、地域の人たちと共に歳をとり、自分の痛みも手掛かりにしながら患者に接近しようとする実践は、時にめぐみのようにおこる相互承認の瞬間に支えられている。こうした語りを通して看取りの経験が死をこえた共同性へと開かれる可能性について検討した。

四名の発表を受けて、コメンテーターの後藤氏は、人類学と社会学における死の研究史を整理した後、自身が沖縄県の離島で実施してきたフィールドワークをもとに死者の多様な姿を示し、死者をめぐる物語に専門職（民間宗教者／医療者）が関与するか否かに言及した。その後、各発表に対するコメントを行うとともに、本シンポジウムにおける「共同性」の指し示す内容が多岐にわたることを指摘した。そのほか参加者からは、医師かつ僧侶ゆえの葛藤の経験や、葬式のみならず死の前後にかかわる活動に関心をもつ僧侶が教団内にどの程度いるのかなど、各発表者に対する質問があり、それぞれの発表者がそれらに応答した。

以上のように本シンポジウムは、死別をめぐる実践的な視点からの発表を通して、現代社会における死や

死別をとりまく状況のほか、参加者個々人の死別をめぐる経験を見つめ直す機会になったと考えられる。



発表の様子



コメントと質疑応答

公開研究会・講演会報告(2023. 10. 1～2024. 3. 31)

公開研究会「草原のシルクロードと仏教の弘通」

東アジア・北アジア仏教研究 研究代表者・教授 松川 節

モンゴル国立大学と本学との研究者往来による共同研究の一環として、P. デルゲルジャルガル嘱託研究員（モンゴル国立大学科学学部人文系歴史学科教授）を11月28日～12月5日まで招聘し、12月1日(金)16:30～18:10に東アジア・北アジア仏教研究班主催の公開研究会（於：マルチメディア演習室）を開催し、P. デルゲルジャルガルの講演「草原のシルクロードと仏教の弘通」を拝聴した。

シルクロードを管轄することは、古代国家の政治・経済・文化の発展にとって重要であった。シルクロードの支配をめぐる月氏と匈奴、そしてやがては匈奴と漢の戦いがこれを示している。多くの研究者は、武帝時代に漢が甘粛回廊を匈奴から奪い取り、西域（トルファン盆地・タリム盆地）と直接境界を接することによって生じたと、『史記』などの漢文資料の記述に基づいて便宜的にみなしている。しかし、それ以前に月氏や匈奴はシルクロードの重要拠点である西域を支配し、シルクロードを統治していた。漢文史料には記されていないため、西域と匈奴とが関係を有していたことに研究者らは言及してこなかった。匈奴、柔然がシルクロードとどこから、どのように結びついていたのか。匈奴の軍はどのルートから西域に至ったのか。進軍ルートと交易路は同一であったのか。モンゴルの地に仏教はどこから、どのようなルートで伝播したのか。これらの疑問に答えるのが本講演の主題である。

結論として、古代よりユーラシアを結ぶ国際交易路（後のシルクロード）は、内陸アジアの遊牧民と西側諸国を結ぶ主要ルートとなり、ユーラシアの発展に重要な役割を果たしてきた。月氏と匈奴はシルクロードの発展に重要な役割を果たした。

・匈奴は月氏との3度の戦いに勝利し、シルクロードでの優位性を確立した。匈奴と月氏との3度の戦いの主な理由は、シルクロードの支配をめぐる争いだったと考えられている。

・トルファンとハミをモンゴル中央部と結んでいたシルクロードの北支線たる「草原のシルクロード」は、柔然時代だけでなく匈奴時代にも起源があると考えられる。

・武帝の時代に漢は匈奴から河西の地を奪い、西域と

直接境界を接して交流するようになったことがシルクロードの起源であるとする説に確証はない。それ以前に匈奴は西域を支配し、僮僕都尉つまり将軍府を設置し、租税を徴収してシルクロードを統括していた。

・匈奴の僮僕都尉は焉耆、トルファンから現在のボドンチ峡谷、現在のホブドのボルガン、あるいは焉耆、トルファン、哈密からタムチーン・ダワー、アルタイ山脈を越えて現在のゴビ・アルタイのシャルギーン・ゴビを抜けて匈奴の地に至ったと考えている。そのためハミ、トルファンの北にシルクロードとモンゴル中央を結ぶシルクロードの北の分流となる「草原のシルクロード」が匈奴時代に成立しているべきであると考えている。

・タリム盆地と匈奴、柔然を結んでいた「草原のシルクロード」は交易路のみならず、宗教文化、軍事戦略の道でもあった。このルートにより文化の交流が起こり、仏教や文字が伝播したのである。ブラーフミー文字（例えばフィス・トルゴイのブラーフミー碑文）がモンゴルの地に伝播したのは、このルートの文化交流の結果であると考えられる。



デルゲルジャルガル先生を囲んで

親鸞仏教センター所長・本多弘之先生 との研究交流会

元東京分室長・教授 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿

東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央・鶴留 正智

2023年12月11日(月)、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、親鸞仏教センターにおいて親鸞仏教センター所長の本多弘之先生と研究交流会を開催した。本多先生はかつて大谷大学で教鞭を執られていたが、東京へと戻られ、自坊の法務を務めつつ、親鸞仏教センターの所長として現代と親鸞の諸問題を考えてこられた。今回、東京分室と親鸞仏教センターとの交流を深め、また各PD研究員の研究を進展させる目的で、この研究交流会が開かれた。

研究交流会はPD研究員4名がそれぞれの研究内容を発表し、その発表内容に対して、あるいはそれぞれの研究関心に応じて話題を発展させながら、本多先生が応答する形式で行われた。以下は、各研究員の報告内容である。

鶴留研究員(真宗学)は、これまで『教行信証』や『歎異抄』に表される思想内容に注目して研究を行ってきた。博士論文は「親鸞思想における他者」という題目で提出し、大学院での研究紀要には「なぜ帰命は勅命なのか—『教行信証』行巻を中心に—」と題して論文を投稿した。今回の発表もまた、自身の研究課題が「勅命」にあることを報告した。

本多先生から応答いただいたのは、「勅命」ということばのもつ重さについて、また実存的問いの重要性についてであった。勅命は、非常に強いことばである。なぜそのことばを使うのか理解できないほど強い。このようにあるはずがないものが「勅命」として表されている。そのようなことをおさえつつも、同時に法蔵願心、本願力回向として勅命と表現されていることを確かめなくてはならない。「勅命」を考えるにあたって、まずこのような本多先生の所感が示された。また、鶴留研究員が勅命という概念から倫理と宗教の問題を考えたい旨を伝え、倫理の問題はあくまで人間関係の善であって、超越的なものとの関係を問う宗教、浄土真宗とは区別されなくてはならないと応答があった。

そして、真宗学の研究態度として、一般の客観的な学問とは異なること、すなわち実存的問いを抜きにして真宗学は成り立たないことを教えていただいた。

たしかに真宗学は学問であり、大学の中にあるのだが、大学というシステムに埋没するのではなく、むしろ実存的な学問としての真宗学が大学の中にあることの意義を考えなくてはならない。本多先生ご自身が安田先生を師としたのも、安田先生がハイデガーなどを参照しつつ、実存的な真宗学を模索されたからにはかない。

鶴留研究員にとっては、総じて、「真宗学」を学ぶことの意義、「真宗学が実存的であること」の重要性を改めて考える機会になった。またこの発表では、「勅命」が『教行信証』中において阿弥陀からに限られる点についても報告したのだが、この点についてはこの発表と応答に限られず、澤崎研究員の発表に対する応答でも展開された。

澤崎研究員(仏教学)は、研究題目である「『大智度論』における不退転の研究」に関して、これまでの研究経過及び今年度における研究課題を示し、それらを踏まえた上で本多先生にいくつかの質問をし、応答をいただいた。質問した内容は、「正定聚」と「不退転」の語句の意味内容の重なりと違いや、大乘仏教における理想的な人間像についてなどである。

まず、「正定聚」や「不退転」さらには「無生法忍」という教義概念に関して、親鸞思想では、仏教の教えによって何が成り立つのかという根幹的な問いに対する応答であり、信心において成り立つ浄土の利益もしくは本願の利益として示されている語句と教授いただいた。親鸞思想では、「正定聚」と「不退転」は同じ課題をもつ語句であり、願と力の成就によって示される人間の生存を支え、真の仏弟子を表象する言葉といえるだろう。

また、理想的な人間像に関して、親鸞思想における人間像の捉え方では、「理想的」という語句があくまでも非現実的なものと捉えられることを前置きした上で、〔阿弥陀の前で〕あえて言えば一切の衆生が凡夫であることを自覚した人間像ということができるとお示しいただいた。それは言うてみれば人間に非現実的な理想を求めない視点であり、徹底的に身体の有有限性を自覚した人間像といえる。さらにこの点について本

多先生は、親鸞が『法華經』を引用しない理由の一つに、『法華經』における釈尊觀が想定されるという。『法華經』に示されている釈尊は無限性を表象する存在として描写されていることから、親鸞が『法華經』を引用しなかったのは、あくまでも親鸞が現実に生きた身体をもった存在として釈尊を捉える釈尊觀をもっていたためではないかと述べられた。有限の世界に身を置きながら、衆生を無限性に志向させる存在として釈尊を捉えているのである。

このようなコメントや質疑応答を通じて、仏教思想における不退転および理想的人間像の展開について意見を深めることができた。

磯部研究員（社会学）は、現代日本の葬儀における僧侶の役割をテーマに研究を行っていることを報告した。大学院生時代には、岐阜や新潟といった地縁や血縁による関係が緩やかに残る地域での事例調査を実施してきたが、東京分室 PD 研究員になってからは、首都圏の葬儀調査を行い、特に法話を通じて寺院と人々のつながりがどのように構築されるのかに着目している。本多先生からは、以下 2 点をご指摘頂いた。第 1 に、「日本の社会学の中に宗教社会学と呼べる領域が十分には育っていない」という人もいるなかで、葬儀における僧侶の役割という学問的関心と社会学とがどのように結びつくのかを考えていく必要があるということである。第 2 に、都市の変遷と人々の暮らしの変化に注目することの重要性である。本多先生からは、浅草に所在するご自坊での経験を踏まえながら、遠方に移住していく門徒との関わり方に関する工夫が聞かれた。

陳研究員（宗教学）は現代における宗教と胎児生命觀の変遷に着目し、特に夭逝した胎児への弔いについて研究を行ってきた。陳研究員は自身の研究関心を踏まえて、本多先生に、(1) 真宗における胎児生命の捉え方、(2) 小児往生の教義論争に関する現代的な意義、を伺った。本多先生はまず近世の越後における小児往生の論争の詳細を説明し、子どもの往生をめぐる問題で最終的に越後の多くの大谷派寺院が佛光寺派に転じた歴史を述べた。続いて、本多先生は自身の宗教觀を語り、個人が主体的に教義と関わる重要性を強調しながら、教義だけで応えきれない現実問題も存在することを提示した。特に子どもあるいはベットの供養は、教団組織の末端にあたる各寺院の住職、僧侶にとっては切実な問題となる。こういった現実直面する際に、教団組織あるいは教義の有効性に委ねるべきか否かを問いかけた。本多先生個人の考えでは、拒否すべき死者はおらず、如来の大悲がそういったものも含めてすべてを受け取ってくれるという。

この研究会を通じて、各 PD 研究員は新たな知見を得て、自らの研究指針を再確認することができた。なお、本多先生との研究交流会は今後も継続される見込みである。



(写真は本多弘之先生)

仏教写本研究公開講演会 (Peter Skilling 先生) 開催報告

仏教写本研究 研究代表者・教授 DASH Shobha Rani

仏教写本研究に関する情報収集及び研究者・研究機関とのネットワーク構築は仏教写本研究班の様々な研究活動の中の一つである。そのため、インド仏教、東南アジア仏教、及び仏教写本研究の著名な研究者である Peter SKILLING (Bhadra Rujirathat) 博士を招聘し、2023 年 12 月 7 日(木)に“Painting the Jātakas in Early Modern Central Thailand” (近世タイ中部におけるジャータカの描画) という題名で公開講演会を開催した。

本公開講演の内容は二部からなる－(1) 仏法の知識源としての写本、(2) タイにおけるジャータカの視覚的伝統に関する最近の研究成果。我々は今仏法について知っている内容の基本的な情報源は様々な写本資料である。仏の教えは口伝と写本の大きく二つの方法で伝播されてきた。口伝の時代へは今アクセスすることができないが、写本はまだできるので、それらのデジタル化、保存、研究が貴重であることを氏は主張した。そして、一般的には古い写本や絵画に研究者があこがれるが、これは「非常に批判的で歴史的ではない態度」であるが、のちの時代の様々な様子を描くより新しいものの価値にも気付くべきと氏は示す。氏の言葉を以下に引用する。「確かにガンダーリーが最も古い。しかし、15 世紀にタイで書写されたパーリ語のテキストはどうだろう？ 私たちは、これがサンガ、僧侶による演奏と朗読の賜物であると信じている。それは 2000 年前にも遡る。しかし、写本の証拠はそれよりもずっと後のものである。従って、私たちはそれについて考えて、通常は行われない年代の階層構造の中でバランスを取らなければならない。」

講演後半の内容の要旨は以下ようになる。

「シヤム (タイ) には、いくつかの文学ジャンル、いくつかの種類の絵画、パフォーマンス、説教、朗読などにおいて、活発なジャータカ文化があった。ジ

ャータカは「聖典パーリ語の箱」の外で繁栄し、ジャータカ文化は前近代のタイ社会と思想の多くの側面に浸透していた。現代の研究では、宮廷文学や、アユタヤ、トンブリー、バンコクの王都の王宮寺院の見事な壁画に焦点が当てられる傾向がある。

タイにおけるジャータカ文化の浸透を説明するために、タイ中部のジャータカ絵画の例を 2 つ紹介する。一つは、ベッチャブリー県にあるワット・ドン・カイ・ティア (Wat Don Kai Tia วัดดอนไก่อติเย) で描かれた、あまり研究されていない木版画である。もう一つは、アユタヤ (Ayutthaya) 県のワット・ムアン (Wat Muang วัดม่วง) の壁画である。これらは 19 世紀末のものである。どちらもパーリ語マハーニパータ (Pāli Mahānīpāta) のダサジャーティジャータカ (ทศชาติชาดก) の 10 のジャータカを描いている。」(Skilling 教授による要旨の和訳である。)

氏は約 40 年前大谷大学を訪問されて以来、本学と長い間関係を持っている。タイから寄贈された本学所蔵のパーリ語貝葉写本の研究にかかわっていたこともあり、今回このような機会が訪れたことに喜びを示された。その意味で今回の講演会は本研究班の研究に関するものだけではなく、本学と古くから縁のある研究者のネットワークを維持するという役割も果たしたと言えるであろう。

本講演は対面と Zoom を利用したオンラインとで行われた。専門的な内容ではあったが、氏は学生たちもわかりやすくゆっくりと基本的なことも説明しながら講演した。本研究班の研究員、研究補助者、東方仏教徒協会 (The Eastern Buddhist Society) の研究者たちの他、仏教に興味を持つ教員と学生数名、そしてオンラインではインド、タイを含む国内外の多くの研究者が参加し、充実した質疑応答も行うことができた。



東京分室 PD 個人研究報告会開催報告

元東京分室長・教授 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿

東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央・鶴留 正智

2024年3月7日(木)に、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、大谷大学響流館3階マルチメディア演習室で「真宗総合研究所東京分室PD研究員研究報告会」を開催した。各研究員の報告概要は以下の通りである。

①鶴留研究員の研究課題は「浄土真宗の古典に示される理念の研究」であるが、今回は、いわばその前段階として、浄土真宗の古典の一つに含まれる『歎異抄』の解釈史、受容史を紹介した。そこで特に注目したのが、『歎異抄』の最も代表的な注釈者、妙音院了祥である。了祥は『歎異抄』の著者を論証したことで名高いが、それがいかに受容され、いかに形成され、変遷したかについての調査は、必ずしも十分なものであるとはいえない。今回は、日本宗教学会で報告したことをベースに、「了祥受容の前後」と「了祥の講義」の二つに分けて発表した。

了祥受容の前後として発表したのは、了祥『歎異抄聞記（聞記）』の出版前後の状況、またそれが誰に、いつ受容されたかの整理である。了祥の『聞記』が出版されたのは1908年であるが、すでに近角常観が求道会館を設立、暁烏敏が『精神界』誌上で「歎異抄講話」の連載を始めていたことが注目される。出版前から東京の宗門人を中心として『歎異抄』への注目が高まっていたことが推測でき、『聞記』の出版はその流れに應ずるものと言えよう。この出版を受けての反応には否定的なものもあり、たとえば1910年出版の蓮元慈広『歎異抄講義』（大谷派安居の次講）では、如信説を否定することが「法主」の権威を否定し、また深励の権威を否定するものであるとして、『聞記』を強く批判する。その後、1922年の梅原眞隆、1931年の金子大榮、1941年の多屋頼俊、1942年の曾我量深が非常に肯定的に了祥に言及し、ここに受容の定着を見ることができる。

了祥の『歎異抄』講義は、大きく前期と後期に分けることができる。前期は、国学の知見を活用するなどの点で従来の宗学からの進展を見ることができるものの、基本的な解釈は深励と差がないと言えよう。一方、後期の講義は非常に斬新かつ説得力ある議論を提示している。これは、あくまで文法と論理に忠実にテキストを読解した成果であろう。

今回は『歎異抄』内部にたちいることはできなかったが、了祥の解釈の独創性を指摘することはできた。その独創性とは、親鸞と親鸞の著述を意味する「宗義」と、覚如から近世に至るまでの解釈の歴史としての「宗学」を明確に区別する、「近代教学」と共通するものである。了祥は、テキスト自体の文法と論理に即した解釈を行うことで、「近代教学」的な解釈を歴史上の「近代教学」に先立って行っていたのであり、その意味で、了祥の『歎異抄』講義は真宗学における画期的なできごとであった。

②磯部研究員の研究課題は、葬儀に僧侶が関与する意味を宗教社会学的な観点から明らかにすることである。本研究を遂行する上で注目すべきは死別悲嘆である。死別悲嘆研究においては近年、死者と遺族の関係を再構築し、死者と遺族のつながりを重視することに重きが置かれている。今回の報告では、死者と遺族の関係性再構築を促すナラティブに焦点をあて、僧侶が死者をいかなる存在として捉え、葬儀の法話でどのように言及しているのかを事例をもとに検討した。

真宗僧侶3名による死者の言及の仕方を整理することで浮かび上がるのは、死別悲嘆に暮れる遺族にとって死者は、一方的に弔うだけの存在に留まらないことである。死者は、自らの死を通して、死別後もなお生きていかねばならない遺族に生きる意味を示す存在として言及されている。死者は、生前の交流を通して遺族の過去にかかわるのみならず、そうした過去の経験が現在の遺族のあり方に影響を与えているとみるならば、遺族の現在にもかかわっていると解釈できる。法話に着目することで、僧侶は死者について、遺族の過去・未来・現在にかかわる存在として言及していることが明らかになった。また葬儀における法話は、死者と遺族の関係性再構築を促すナラティブの人々に提供する機会と見なせる。先行研究に示されるように、ナラティブとは橋をかける行為であり、関係づける作用のことを表す。関係づける上では表現の仕方が重要である。葬儀の法話は、死というシビアな事実に対峙する中で、逸話を交えながら物語的に語る側面と、説得的・論理的に言い切る側面が組み合わさることによって成立している。またナラティブは、今、ここで生成されるとともに、語り手と聞き手の相互行為の結果と

して生み出される。遺族からの問いかけによって、僧侶自身の教義理解が揺るがされ、再考を迫られることもある。このように葬儀の法話は、語り手である僧侶と聞き手である遺族と参列者、さらには死者の存在に影響を受けながら、葬儀の時空間で構築されていくものとして捉えられることを指摘した。

③澤崎研究員は、昨年度に引き続き「中国仏教における不退転の概念内容の解明」を研究課題とした。本研究では、仏教思想における理想的人間像の解明を試みている。『大智度論』を研究対象として、さとりを得る道程から二度と足を踏み外さない境地＝「不退転」が、どのような思想的根拠のもとに示されているかを明らかにすることが本研究の目的である。

本研究は、『大智度論』研究と「不退転」研究を核としつつ、大きく四つの方面に関連する。まず①大乘仏教の中国的受容の思想背景の解明につながる。他の龍樹著作との比較を通じた龍樹の影響力の解明や、地論宗や天台、三論宗との思想比較における一つの基準を提供する。②大乘仏教徒が求めた修道的目標という方面では、菩薩という仏陀に成ることが定まった人間を支える思想的根拠、その具体性を明らかにすることに寄与する。また③「般若經典」の形成史にも関連する。近年、經典と注釈書の緊密な関係が明らかになったことから、「般若經典」の最古の注釈書である『大智度論』の思想を体系的に分析することは、インド・チベットとの思想比較に不可欠なものとなる。最後は④現代につながる思想研究である。經典という「仏のことは」をいかに受容するかという命題は、現代にも通じる課題といえることができる。

上記の四つの方面を見据えた研究成果として、『大智度論』における「往生」と「神通力」は、菩薩の不退転の思想的根拠であったことを報告した。

④陳研究員の研究関心は現代社会における宗教と胎児生命観の変遷であり、具体的には日本と台湾を中心に「水子供養」と「胎児生命尊重運動」の二つの側面から研究を進めてきた。本報告会において、陳研究員は今年度の個人研究及び共同研究の内容を提示し、これを東京分室 PD 研究員としての3年間の活動の中に位置付けようと試みた。

陳研究員は、昨年の9月3日から9月18日に台湾で調査を行い、カトリック教団が中心となって開催した“March for life”（中国語：為生命而走）の活動に焦点を当てた。March for life はロー対ウェイドの判決を受け、1974年にアメリカで行われた胎児の生命尊重を訴えるデモ活動である。台湾において、2019年アルゼンチン籍のシスターの主導で初めて小規模なイベントを試行し、2022年からはカトリック教団の

全体的な活動と位置付けられるようになった。2023年9月16日に、台中教区をはじめ、五つの教区でそれぞれ March for life が開催され、クリスチャンを中心に約3000人弱が参加した。陳研究員は、このような動きを2000年代中盤に盛んになった優生保健法の修訂運動と対比した。動員者数および台湾社会での注目度は高いとは言えないものの、日本やアメリカの団体を招き、国の境界線を超えての動きの萌芽も見え、今後さらに注目すべきと考えられる。

個人研究で得られた成果を踏まえながら、陳研究員は東京分室での共同研究を介して研究における新たな可能性を模索してきた。「いのち、胎児、宗教」をキーワードに、陳研究員は3年間自身が携わってきた三つのシンポジウムと公開研究会の内容を紹介した。中でも特に今年度の公開研究会「赤ちゃんを失う悲しみと向き合う——医療・宗教・社会——」（2024年3月10日開催予定）の開催趣旨に関する報告を行った。報告終了後、質疑応答が行われ、本報告における「宗教」という用語の使い方、医療施設における宗教とグリーフケアの取り組み、今後の研究の展開など、さまざまな質問が寄せられた。

以上のように、4名のPD研究員によって研究成果が報告された。大谷大学学長、真宗総合研究所所長と主事をはじめとする教職員のほか、大学院生など多数の参加があり、領域横断的な質疑応答が展開された。



報告の様子

公開研究会開催報告「赤ちゃんを失う悲しみと向き合う－医療・宗教・社会－」

元東京分室長・教授 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿

東京分室 PD 研究員 磯部 美紀・澤崎 瑞央・鶴留 正智

大谷大学真宗総合研究所東京分室共同研究の一環として、2024年3月10日(日)に公開研究会「赤ちゃんを失う悲しみと向き合う－医療・宗教・社会－」を開催した。東京都千代田区に所在する・貸し会議室・御茶ノ水トライエッジカンファレンスを会場に、オンライン（Zoom）も併用し、ハイブリッド形式で行った。対面及びオンラインで、約65名の方が参加した。

本研究会は、岩井未来氏（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授・石井記念愛染園附属愛染橋病院チャプレン）、蛭田明子氏（湘南鎌倉医療大学看護学部看護学科教授・聖路加国際大学 PCC 事業 天使の保護者ルカの会スタッフ）及び白井千晶氏（静岡大学人文社会科学部社会学科教授）の3名を登壇者として招いた。

最初にコーディネーターを務めた陳宣聿（元東京分室 PD 研究員）が趣旨説明を行った。家と地域共同体によって支えられていた自宅出産の時代と違い、日本では1960年代以降、病院や診療所といった施設での出産が中心になり、医学が習俗や儀礼に取って代わって妊娠・出産の場で主導権を握るようになってきた。出産の医療化によって、子どもが元気に生まれてくることが高く期待されているゆえに、その期待が裏切られたときの喪失感以前よりも大きくなっていると考えられる。本研究会の開催趣旨は、流産、死産、人工妊娠中絶や新生児死亡といった周産期喪失に対する悲しみの側面に着目し、医療、宗教、社会の三つの側面を通して、その現状及び赤子をなくした悲しみとの向き合い方を考えていくことである。

趣旨説明の後、岩井氏が最初の発題「流死産の家族と死児へのケア——宗教的ケアとして数珠のプレゼント」を行った。岩井氏は浄土真宗本願寺派の僧侶でありながら、公共空間で働く宗教家「チャプレン」でもある。報告において、岩井氏は自身が長年勤める石井記念愛染園附属愛染橋病院（以下、愛染橋病院）で行ってきた産期喪失へのケアを提示した。以下は岩井氏の報告内容である。

大阪市に位置する愛染橋病院は、2010年、遺族へのグリーフケアを行うことなどを目的に常勤の仏教チャ

プレンを採用し始めた。2023年からは、心の相談室に仏教チャプレン・キリスト教チャプレン・臨床心理士の計3名を配置している。チャプレンによるグリーフケアの対象は、成人病棟では主に癌患者とその家族、周産期病棟では流死産の女性とその家族、小児科では重症疾患の患児とその家族である。

産科病棟では、チャプレンが配置される以前から、流死産の患者へのグリーフケアも行われていた。2016年から、チャプレンが信仰の有無及び家族の意向を確認した上で、亡児の手の大きさに合わせてチャプレンが制作した数珠の贈呈を開始した。こういった数珠は元々、亡児が火葬に向かう前に希望者に対して病院から提供する付属品である。しかし、付属品として提供された数珠は成人のサイズで、亡児の手にそぐわなかったため、岩井氏が新たに数珠贈呈を発起した。数珠の提供といったケアに対して、「かわいい」と喜ぶ家族が多く、看護職を対象とするアンケート調査においても「かわいい」「母親のケアになる」「亡児のケアになる」といった回答が多く見られるという。

続いての発題は、蛭田氏による「分かち合いの場で語られるご両親の想い」である。蛭田氏は、看護学を専門にし、長年周産期に子どもを亡くした両親と家族を支援するサポートグループである天使の保護者ルカの会にスタッフとして携わっている。報告において、蛭田氏は周産期喪失で我が子を失った体験者の語りを中心に提示し、日常生活の中に揺れ動く悲しみの様相を丁寧に提示した。以下は蛭田氏の報告内容である。

流産・死産等出産前後の子どもの死は、両親にとっては大切な我が子、一人の人との死別である。しかし、「公認されない悲嘆」といわれるこの死別では、社会の人にその死を重大なものとして認識されにくい。目の前に子どもがいらないこと、そのことがすでに大きな悲しみであるのに、子どもの親として悲しむこと、亡くなった子どもとのつながりを求めること、こうしたことを、社会の中で、時には家族の中でも、当たり前前に表出できない悲しみやつらさを、両親は抱えることがある。子どもがいらないこと、そのことがすでに大きな悲しみであるのに、子どもの親として悲しむ

こと、亡くなった子どもとのつながりを求めること、こうしたことを、社会の中で、時には家族の中でも、当たり前に出出できない悲しみやつらさを、両親は抱えることがある。

両親の多くは強い孤独感を抱き、同じような体験をした方と話をしたい、誰かとつながりたいという思いで、分かち合いの場に参加する。また、亡くなっている子どもの親として行為し、話ができることに、分かち合いの場の意味を見出している。子どもの存在、そして悲しみの形は両親の中で次第に変容していくが、何年経っても親であるという思いは変わらず、悲しみと共に両親は生きている。そうした両親のありのままの姿を認め、支える社会の醸成が期待される。

最後、コメンテーターの白井氏は比較の視点を入れて、現代日本と異なる時代や地域における流産、死産及び胎児観を提示しながら、本研究会で取り上げた周産期喪失のグリーフケアの特徴を明らかにした。また、白井氏は特に岩井氏と蛭田氏の報告内容を深め、周産期喪失における男性へのサポート及び人工死産の経験者へのサポートについて、お互いの活動を通して議論を広げた。

その後、会場と現場及びオンラインの参加者から、自身の経験を含めたさまざまな質問が寄せられた。具体的には、悲しみを語ることの意味、出生前診断の意思決定をめぐるアセスメント、悲しみからの「回復」といった視点、調査や研究の姿勢、エンバーミングと葬儀などであった。

出産の医療化によって、現代日本における妊娠・出産は主に病院で行われるようになり、理想的なお産とは異なる「思いかけない出産」としての周産期喪失への対応にも医療機関が携わるようになった。しかし、我が子を失う悲しみは継続し、繰り返していく日常の中に、職場、地域、サポートグループといった関わりも必要となる。本研究会は医療機関におけるチャプレンの取り組みとサポートグループに長年携わってきた経験者の語りを通して、現代日本における周産期喪失への理解を深めた。



会場全体の様子



質疑応答

国内研究調査報告 (2023. 10. 1～2024. 3. 31)

国内研究調査出張報告 沖縄

元東京分室長・教授 福島 栄寿

元東京分室 PD 研究員 陳 宣聿 (10月28日分執筆)

東京分室PD研究員 鶴留正智(10月29日分執筆)・澤崎瑞央(10月30日分執筆)・磯部美紀(10月31日分執筆)

2023年10月28日(土)から31日(火)にかけて、当時、東京分室に所属していた福島栄寿(元東京分室長)・陳宣聿(元PD研究員)・鶴留正智(PD研究員)・澤崎瑞央(PD研究員)・磯部美紀(PD研究員)の5名が、真宗総合研究所東京分室指定研究の活動として、沖縄における「共生」のあり方の実態を知るために現地調査を実施した。以下では、調査日ごとに調査概要を示していく。

10月28日(土): 初日は空港から直接、首里城の近辺にある寺院「達磨峰西来院」(以下、西来院)に向かい、現住職の片岡禪勝氏に聞き取り調査を行った。西来院は「達磨寺」とも呼ばれ、安産祈願、招福開運、水子供養など、人々の生活と密接する願いを反映する信仰が多く見られる。

臨済宗妙心寺派の西来院は、尚真王時代(1477-1526)菊隠禪師が開山した由緒ある寺院である。明治初期、西来院は首里儀保町から現在地(赤田町)に移転した。片岡氏によると、現在、西来院は「達磨寺」として親しまれているが、かつて地元の人々からは「赤田のウティラグァー」と呼ばれてきた。「ウティラ」とは、「お寺」のことを指し、語尾につける「グァー」は親しみを込める愛称であるという。赤田のウティラグァーから「達磨寺」に呼称が変わるターニングポイントは1970年代にある。沖縄復帰(1972年)の前後、沖縄に建築ラッシュが生じ、西来院もこれを機に境内の整備を始めた。沖縄では寺社仏閣を専門にする設計士へのアクセスが比較的困難であるため、整備にあたり、先代住職が本土の寺院をまわり、寺院建築に関係する情報収集を行った。本土で訪ねた「達磨寺」をきっかけに、本々の元々の寺号「西来院」が祖師西来(達磨法師)を意味することから、達磨寺と名乗り始めた。

西来院は、「首里十二ヶ所巡り」の寺院の一つである。首里に位置する4つの臨済宗妙心寺派の寺院(西来院、慈眼堂、盛光寺、安国寺)では、それぞれ十二支の守り本尊が祀られている。参拝者は自身の干支に当たる本尊に参拝するか、あるいは民間宗教者の「ユ

タ」を介してすべての寺院を回るといった形式で参拝を行う。首里十二ヶ所巡りは、ピンシーと呼ばれる重箱に供物を入れて行われる参拝日は六曜からの影響を受けやすく、特に「大安」の日で参拝者が多く見られるという。寺檀制度が定着していない沖縄において、首里十二ヶ所巡りの信仰は参拝者が寺院を訪ねる一つのきっかけにもなると考えられる。しかし、同じ場にながら、民間宗教者のユタが中心を担う首里十二ヶ所巡りの参拝と、仏教の教義との間に相反するものもある。例えば、毎日熱心に参拝しながらその寺院の宗派を知らない者や、参拝する際に神霊の憑依が仏教儀礼の進行に影響を与えるといった状況も少なからず存在する。これらを通して、仏教儀礼と民間信仰が緊張的な関係にありながら、相補する側面もあることが窺える。



西来院

10月29日(日): 2日目は沖縄南部の沖縄県平和祈念資料館やひめゆり平和祈念資料館などを訪問して平和学習をした後、浄土宗の寺院である楽邦寺を訪問し、調査を行った。

まず沖縄県平和祈念資料館であるが、ここには戦中だけではなく、「琉球国」が「沖縄県」として明示的に「日本」の一部となっていく近代から、戦後の復

帰、またそれ以後を含めた歴史が展示・紹介されている。ガマを模造した象徴的な展示や、あるいは証言、映像などを通して戦争の悲惨さの肉声を伝えるのはもちろんだが、同時に、いかにして「沖縄」が「日本」になっていったのか、つまり皇民化政策についてもスペースを割いて説明を行っていた。同時に、戦後、平和憲法をもって出発し、サンフランシスコ講和条約によって主権を回復した日本に対して、占領下にあって主権を奪われたままの沖縄が復帰運動を行っていくこと、復帰は果たされたが依然、基地問題を抱えたままであることが展示されていた。

沖縄県平和祈念資料館は摩文仁の丘を望む場所にあって、同じ公園内に沖縄戦で命を奪われたすべての人々の氏名を刻んだ「平和の礎」や、国立沖縄戦没者墓苑、各都道府県、団体の慰霊塔が建立されている。この公園は海を望むとても美しい場所であるが、同時に、非常に激戦地でもある。広い公園を歩きつつ、死者を悼むこと、その方法、そして戦争と平和について考えさせられた。



沖縄県平和祈念資料館

次いで、ひめゆり平和祈念資料館を訪れた。この資料館は1989年、日本社会において戦争の記憶が薄れていくなかで、その悲惨さを忘れないよう建てられたものである。かつては体験者が語る場も設けられていたが、時が経るにつれて、直接に話を聞くことは難しくなっている。戦争が悲惨であることは論をまたないが、日本が戦地であった時代から時を経ているために、いかに悲惨であるのかを学ぶことには難しさも出てきている。宗教と社会の関係という観点から見れば、かつてその宗教教団、宗教者が戦争とどのように関係をもったかを知ること自然であると思われるが、戦争がいかなるものであるかを知ることまた、宗教研究において一種の重要性をもつだろう。



ひめゆり平和祈念資料館

この日は最後に、楽邦寺を訪問し、調査を行った。楽邦寺は浄土宗の開教寺院で、先代住職である宮城親照氏が1988年に開山し、現在は子息である宮城親誠氏が住職を務めている。先代住職は、もともと寺院出身というわけではなく、通信制課程で仏教を学んだ。仏教を学ぶきっかけとして前住職は「偶然」を語るが、同時に、その前後に前住職が母を亡くされたことは一つの重要な要素になっていると思われる。この前住職が当初、ハガキを通じて布教伝道を行い、そのような活動を含む宗教行為が認められて、現在では宗教法人格を取得した。沖縄県における仏教教団の寺院の活動の主要なものには葬儀が挙げられる。民間宗教者のユタが亡くなった際にも、多くの場合、葬儀は仏教寺院が担う。



楽邦寺

10月30日(月): 3日目の午前中は、沖縄本島中部の東海岸に位置するうるま市にある沖縄唯一の天台宗の寺院である地藏院を訪れた。住職である金城永真氏が

ら、沖縄における宗教形態や葬儀について、また氏の仏教との出会いから僧侶になることを志したきっかけ、現在に至るまでの活動内容について聞き取り調査を行った。

金城氏は、駒澤大学でカウンセリングを専攻し、大学院に進学する。とくに箱庭研究会における集団カウンセリングなどの学びを通して、前世の問題や自我について思いを馳せることが徐々に多くなっていったという。その後、僧侶になることを志し、比叡山の弁天堂で修行をした後に、東京の深大寺で法事や祈願などの儀礼を学んでいく。そして、祖母が危篤になったことを契機として、1987年ごろに生まれ故郷であるうるま市に戻り、僧侶としての活動を始めていくことになった。

金城氏の祖母はある種の霊能者（クリンフ・司祭）であったことから沖縄の風習や祭祀に詳しく、金城氏自身も祖母の影響を強く受けていたと語る。金城氏は様々な沖縄の風習を寺院活動に取り込んでおり、例えば葬儀儀式の際には、拝詞（グイス）という沖縄の神様への言葉や、沖縄特有の語り口を用いている。金城氏は沖縄の風習との融和を念頭に置いて寺院活動を展開しているため、ユタとも交流関係がある。金城氏からは、うるま市における宗教活動について詳細に聞くことができ、特に困難が予想される仏教と沖縄独特の祭祀との融和を図る方針が明確に見て取れた。このような問題に対し、氏自身が、沖縄の宗教観について深く理解した上で融和的に儀式に組み込むことによって、自身の問題も含めて解決しようとしていることは特徴的な点と言えるだろう。



地藏院

3日目の午後は、宜野湾市にある東本願寺沖縄別院を訪問し、岸本雄志氏から聞き取り調査を行った。岸

本氏は、沖縄で生まれ育った大谷派の僧侶である。体調を崩していた母親を手助けしていた経験から、患者を支える人も含めて助けたいという思いをもつようになり、大学では福祉系を学ぶことを選択する。卒業後は福祉支援員として働くが、現状に対する不安や人間関係の問題を抱えることが多くなったことから自然と寺社仏閣を巡るようになったという。その後に大谷派の僧侶と出会い、教えを押し付けられることはなく、聞けばなんでも答えてくれる関係を続けていくうちに、自身も僧侶になりたいという思いを強くもつようになっていった。28歳ごろに専修学院に進学し、その後は沖縄別院で法務を手伝うようになる。

僧侶になってからは、葬儀など儀式や事務的作業に追われることも多く、思い通りにいかない日々も多いという。しかし、人がお互いの人生を生きていること、そこに願いがあることを学び、そして伝えていく姿勢を持ち続けたいとする言葉には、沖縄という地で新たな僧侶が生まれてきた過程が凝縮されているようで、おそらくは昔日にも繰り返行われていた、布教の現場にある仏教徒の姿と重なり合うようにも感じられる。



東本願寺沖縄別院

10月31日(火)：4日目はまず、読谷村に位置する何我（ヌーガ）寺において、真宗大谷派僧侶の知花一昌氏を対象に聞き取り調査を実施した。知花氏が念仏者を志した契機として、学生運動を展開する中でマルクス主義の限界を感じて（「人間の主体性が十分には発露できない」）、新たな拠り所を模索していた際に出会ったのが浄土真宗の「教え」であり、「こういう生き方があるんだ」と知ったことが語られた。知花氏は浄土真宗を「優しい宗教」と表現する。ここでいう「優しさ」とは、組織や集団に体现されるような上下関係には捕らわれずに、平等を重んじる姿勢を評している

と考えられる。一方、厳しい修行を伴わないことから、浄土真宗を「仏教」とはみなさない人もいう。布教上の困難を尋ねると、「宗教は人間の生き様を変えることだから、そんなに簡単には迎合しない」という言葉が聞かれた。ここから、知花氏にとって「宗教」とは、いかにして生きるかという問いと直結するものであることがうかがえる。また何我寺の活動の一環として、月3回の勉強会に加えて、2023年9月からは坊主バーを営むようになったという。これは、寺院の収益面を補うのみならず、地域において人々が集う場を提供することを通じて、寺院や地域の活性化を後押しする取り組みとして捉えられる。



何我寺

続いて、1868年創業の照屋漆器店において、営業総括部長の照屋慎氏に聞き取り調査を行った。照屋氏からはまず、仏壇や位牌を通した先祖祭祀の重要性が指摘された。照屋氏は、仏壇・位牌の小型化や「仏壇じまい」に象徴されるように、「沖縄の大事な心」である「親族間のつながり」が昨今失われつつあることを危惧している。血縁による共同意識が希薄化しつつある時代だからこそ、仏壇や位牌を通して、現在の自分まで脈々と受け継がれてきたつながりに対する感謝を思い起こしてほしいと語る。仏壇の販売をめぐるのは、単にモノを売るのではなく、遺族・親族・故人の様子を丁寧に見聞きしながら、各家庭の状況に適した

供養の仕方を提案しているという。また照屋氏からは、現代の僧侶に対する期待についても言及があった。寺檀制度の根付いていない沖縄において仏壇業者は、人々のニーズに合わせて宗教者を紹介する窓口としての役割も果たしている。そうした仏壇業者の視点から僧侶に期待する役割として、「命の大事さ」について言葉を尽くすこと、同じ目線で人々に寄り添うこと、「沖縄の文化」と「本土の仏教文化」の両方を知った上で供養を行っていくことが指摘された。



照屋漆器店

海外研究調査報告（2023. 10. 1～2024. 3. 31）

善導大師ゆかりの西安と中国仏教美術の 至宝・麦積山石窟、炳靈寺石窟を訪ねる旅

東京分室 PD 研究員・研究代表者 澤崎 瑞央

2024年2月27日(火)から3月3日(日)にかけて、大正大学の「中国浄土教研究会」が主催する中国研修調査旅行「善導大師ゆかりの西安と中国仏教美術の至宝・麦積山石窟、炳靈寺石窟を訪ねる旅」に参加した。研究調査には、主催の石川琢道氏（大正大学教授）と工藤量導氏（大正大学専任講師）に加えて、佛教大学、龍谷大学、早稲田大学、そして大谷大学から計20名を超える若手研究者と大学院生が参加した。出張の目的は、他大学の研究者との交流、西安・蘭州の仏教史跡および石窟調査と、今後の研究に向けた資料収集と情報収集である。

訪れたのは、長安近郊にある玄奘三蔵の舍利塔が立てられている興教寺、善導を祀る崇霊塔がある香積寺、鳩摩羅什が漢訳事業に尽力した逍遙園を起源とする草堂寺、大雁塔のある大慈恩寺や西北大学内にある実際寺跡地などである。また懷感や迦才を専門とする研究者による講義を受けながら、ゆかりの寺院跡地を巡った。

さらに、麦積山石窟・炳靈寺石窟では、北魏時代からの仏像・塑像を確認した。特に炳靈寺の第168窟には、確認される限り中国最古となる「無量寿仏」「得大勢至菩薩」「観世音菩薩」の三尊像が現存しており、現地研究者によると420年頃のものだとされている。

本出張により、現地調査における方法論、学際的な研究と幅広い視野、そして多くの研究者との交流を図ることでき、多岐にわたる成果が得られた。



大谷大学貝葉写本研究に関わるタイ調査出張

仏教写本研究 研究代表者・教授 DASH Shobha Rani

2024年3月2日(土)~2024年3月11日(月)の期間中に本研究班の写本データの整理、最新技術を使用した入力方法・確認作業及び今後の研究に役立つような情報と資料の収集、研究者・研究機関とのネットワーク構築を主な目的としてタイへの調査出張を行った。

現地に於て、本研究班の嘱託研究員である Suchada Srisetthaworakul 博士と合流し、研究活動に取り組んだ。アユタヤの Dhammchai Institute (以下、DCI と略す。本学真宗総合研究所と2023年に学術協定締結済みの組織) にて大谷大学所蔵の貝葉写本に関する研究及び資料収集を中心に活動を行った。DCI を訪問し、所長の S. W. ターナヴットー博士と会い、研究目的を説明し、協力を仰ぎ、DCI の人材や資料提供など大いに協力してくださるとの約束を得た。

本班の研究活動の一つとしては、ドイツのハイデルベルク大学との共同研究会である Manuscriptology and Digital Humanities において人文情報学の最新技法を用いてどのように写本研究を実施するかというテーマで様々な研究者の研究の紹介によって情報収集し、学び続けることになっている。そこで DCI の写本研究の取り組みについての研究発表を聞き、昨年度 DCI に足を運び実際に研究方法を確認した。そして昨年は DCI と本研究所の協定も締結できたことがあり、2023年度はその技法を本研究班の研究にも導入することになった。

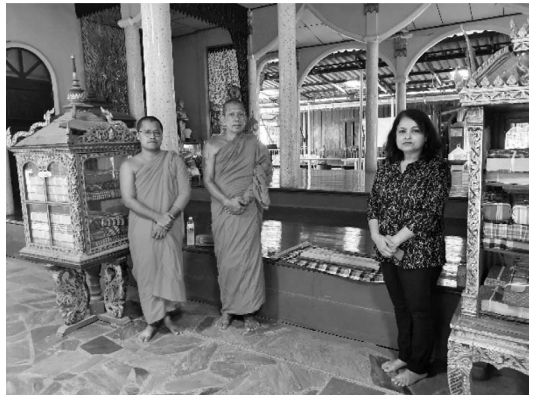
上座部仏教写本に関する DCI の研究活動を紹介する *The Palm-Leaf Manuscript Preservation: The Dhamma Inheritance* という出版物もいただいた。本班の今後の研究に活用する。

さらに、アユタヤ郊外にあるモン族の仏教寺院に所属する貝葉写本を調査させていただくことにもなった。本学の所蔵写本はタイの王室より寄贈されたものと思われるため、同時代の写本も閲覧した。

上記の研究活動を今後も継続的に行う予定である。



DCI にて研究会の様子



寺院での調査の様子 1



寺院での調査の様子 2

歎異抄ワークショップ開催・参加報告(2023. 10. 1~2024. 3. 31)

第12回歎異抄ワークショップ参加報告

国際仏教研究 研究員・准教授 Michael J. Conway

大谷大学大学院博士後期課程真宗学専攻第3学年 Lyu Zhengmin

国際仏教研究 研究補助員 大谷大学大学院博士後期課程真宗学専攻第2学年 但馬 普

第12回『歎異抄』翻訳研究ワークショップは、2024年3月22日(金)から24日(日)までカリフォルニア大学バークレー校の主催によってバークレー市内の浄土真宗センターにて開催された。報告者は、本学の大学院生2名(博士後期課程(真宗学専攻)第2学年のLyu Zhengmin氏と博士後期課程(真宗学専攻)第1学年の但馬普研究補助員)と木越康研究員とともに3月21日にカリフォルニアに渡った。ワークショップ参加を終えた報告者と大学院生は、25日に出発し、26日に帰国しましたが、木越研究員は、3月28日から30日に開催されるシンポジウムに登壇するためにバークレーに残った。

今回のワークショップは、2017年に本研究所・龍谷大学の世界仏教文化研究センター・カリフォルニア大学バークレー校の東アジア研究所の三者間で結ばれた協定に基づき、江戸期に作られた『歎異抄』の注釈書を英訳することを通して、『歎異抄』の注釈史を反映する正確な英訳の作成を目指すことに加えて、各大学に所属している若手研究者の育成を目的として取り組んできたプロジェクトの一環として開催された。そのプロジェクトの詳細については、縷々、本誌に報告してきたので、以前の号を参照されたい。

本報告において参加した大学院生の報告を紹介する。まず、Lyu氏の報告は次の通りである。

三月の二十三日から二十五日まで、サンフランシスコ市近郊のバークレー市で開催された「歎異抄ワークショップ」に参加させていただいた。この度、江戸期の『歎異抄』講義録の英訳作業を通じて、先学の『歎異抄』理解をどのように引き継ぎ、現代社会にどのようにいかにせるかという諸課題に、異なる専門分野や文化背景を持つ学者や宗教者が協力して新たな切り口を与えることが期待される。

二十三日と二十四日には、深励班の議論に参加していた。深励班では、『歎異抄講林記』の第十四章の注釈を中心に議論が進められていた。中でも、注目されたポイントの一つは、「説心次第」という深励の用語

を「describing the arising of the mind [of faith] in order」と訳されることが適当かどうかについての議論であった。また、『歎異抄』第十四章の原文における「一念」を翻訳する際、「行の一念」あるいは「信の一念」として区別して訳し分ける必要性についても議論された。これらの議論から、江戸期講義録の内容が英訳される際に、引用文の原文や専門用語、また英訳の方針など再確認する必要があると感じられる。

最終日には円智班に参加していた。円智班でも同様に『歎異抄』第十四章の注釈から訳されていた。そこで、UC Berkeleyに所属している研究者であるHOU先生が、「障」「忍」など重要な仏教概念のサンスクリット語および漢文の意味を精密に区別し、中国仏教分野からの識見を述べていた。また、深励と円智・寿国ともに恵心僧都の『観心略要集』の文を引用していた点に注目すべきである。これに関して、『歎異抄』に関する諸注釈書における解釈の連続性を一つの検討すべき課題と考えられる。

討論会では、UC BerkeleyのBlum先生が円智『歎異抄私記』に使用される「善縁」「退縁」「悪縁」という言葉の意味と用例について説明していた。その後、寿国『歎異抄可笑記』英訳を担当する龍谷大学の嵩先生が、『可笑記』の第十五章に引用される『顕揚抄』という書物に言及し、『顕揚抄』についての情報を調べる必要性を強調していた。また、法然と道綽の関係に関する興味深い記述が共有され、江戸期の真宗学におけるこれらの見解がどのように受容されていたかを検討すべきだと思っている。最後に、本学のコンウェイ先生は、『講林記』において「無生法忍」の意味が「浄土に往生して涅槃を証る処」と解釈され、さらに基の『法華玄賛』を引用し解釈された点に注目した。また、現行の『歎異抄』での「病悩苦痛せめて」という言葉と、『講林記』による「病悩苦痛せしめて」の表現の差に注目し、それによって深励の時代に用いられた『歎異抄』の底本を調査する必要があると提言していた。

今回の「歎異抄ワークショップ」への参加を通じて、再び聖教の魅力を感じさせている。また、異なる分野の専門家と交流するため、英語や中国仏教を学ぶ必要性を痛感している。

続いて、但馬氏の報告は次の通りである。

私は昨年龍谷大学で行われた歎異抄ワークショップに続いて今回が2度目の参加であった。ここでは浄土真宗センター (JSC) の方々への感謝と私が参加した寿国の部会 (テキスト:『歎異抄可笑記』(1740年)、指導:龍谷大学嵩満也先生)での役割と議論について述べる。

第一に、ワークショップの会場と宿泊場所となったJSCの方々に深く感謝を申し上げたい。会場の提供に加え、参加者の宿泊から食事に至るまで、JSCの方々が活動を土台から支えてくださったことによってワークショップが成立したと言っても過言ではないだろう。とりわけ、安心して休める場所と美味しい食事の提供に笑顔溢れる歓待は、初めて渡米した私に安堵を与えてくださった。直接伝えきれなかった感謝をここで改めて申し上げる。

次に、私は3日間を通して寿国の部会を中心に参加した。今回、この部会は第15章の冒頭から翻訳が始まり、参加者は少なかったものの円滑に作業と議論が進み、最終セッションを前に第15章の翻訳を終えることができた。この部会は主に嵩先生が試訳を提示し、その英訳表現を英語のネイティブスピーカーが意見を出して議論を行い推敲するという形で進化した。ただ、私はヒアリング・スピーキング能力の不足からその議論や推敲に加わることは難しかった。しかし、私は日本語のネイティブとして主に以下の役割を担った。それは①試訳に原文の内容が全て反映されているのかの確認、②原文読解と③典拠の確認、並びに④古語や漢字、仏教用語の意味の提供の4つであった。

例えば②について、「もうに心得まどひて他をも惑はす」の読解に対して意見を出した。初めは「もうに」を、「妄に」と理解し「without reason」と訳されていた。それに対し、『日本国語大辞典』に「猛に…程度がはなはだしいさまを表わす語」とあり、かつテキストと同時代の出典が多く示されていることから、原文の意は「みだりに心得違いをして」ではなく「はなはだしい心得違いをして」という意味ではないかと提起した。その結果、「はなはだしい」の訳語を探すことになり「seriously」という表現に落ち着くことになった。このように、翻訳をするにあたって漢文の音のイメージから訳された場合、原文と異なる意味に訳される可能性があるため、日本語の側から講義が行われた時代の言葉遣いに照らして語句の意味を取る

必要性も感じられた。

また③については、講義で述べられる聖教の典拠を確かめ提示した。第15章には様々な聖教からの引用がなされており、その多くは典拠を述べた上で引かれているが、「[「無碍の光明一味」とは、無明を破し志願を満つる光明の利益に益せらるる身なるゆへに、その心顛倒せず虚偽ならず]」のように典拠を明示せずに『教行信証』の言葉が述べられている箇所があったため、その典拠を部会に共有した。

今後の課題として、今回のワークショップの時間内では人物や典拠を確認しきれない箇所がいくつかあったことが挙げられる。一つには「鎌倉」の「良善法印」なる人物の確認、二つには『顕揚抄』という書物の確認、三つには「黒谷の言はく」の典拠の確認、最後に「法然は」「道綽禪師にならひ下へるなり」と述べられる一文の典拠の確認である。これらの中には現存しないものも含まれている可能性があるが、これらを確認することによって寿国の時代に通用されていた参考文献や伝承を提示することができると思われる。また、それによって円智の『歎異抄私記』(1662年)から深励の『歎異抄講義』(1801~1808年)の間における学びの一端が明らかになることも期待される。

今後も引き続きワークショップに参加して、原文読解・典拠の確認を中心とした役割を果たしつつ、江戸期の『歎異抄』理解と学びの変遷を追っていく所存である。

以上のように、参加した大学院生は、ワークショップに参加することによってテキスト読解の手法や視点について他の参加者より刺激を受け、学ぶ点が多く見られる。

2024年度に現行の協定書に指定されているワークショップはすべて開催されることになるので、今年度中に、成果出版に向けた本プロジェクトの次の展開について三者間で協議し、新たな協定を結ぶ予定である。

真宗総合研究所彙報 2023. 10. 1 ～ 2024. 3. 31

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2023 年 10 月 2 日 12:20～12:50

(響流館 4 階会議室)

1. 次年度 PD 研究員の募集について
2. 2023 年度真宗総合研究所 研究体制について (報告)
3. 客員研究員の受入について (報告)
4. その他

◇2023 年 11 月 2 日 12:20～12:50

(響流館 4 階会議室)

1. 『研究紀要 第 41 号』査読・校閲結果について
2. 2024 年度 PD 研究員の募集について (報告)
3. 2024 年度 真宗総合研究所 研究計画について (報告)
4. 2024 年度 一般研究 (予備研究) エントリーについて (報告)
5. 一般研究 (予備研究) 対象区分について
6. その他 (国際シンポジウム開催予定 (12 月)、他)

◇2024 年 1 月 10 日 16:30～16:50

(博綜館 5 階第 5 会議室)

1. 『真宗総合研究所 研究紀要』第 41 号について (報告)
2. 2024 年度 PD 研究員について
3. その他

◇2024 年 3 月 14 日 13:00～14:30

(博綜館 5 階第 5 会議室)

1. 『真宗総合研究所 研究紀要』第 41 号について (報告)
2. 2024 年度 研究計画 (案) について
3. 特別研究員について
4. 2024 年度 研究所体制 (案) について
5. 一般研究 (予備研究) について
6. 研究所事業自己点検・評価について
7. その他 (3/10 東京分室公開研究会について)

■特定研究「大谷大学樹立の精神」100 年

【研究会】

日 時：10 月 9 日 18:00-19:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：10 月 16 日 18:00-19:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：11 月 6 日 18:00-19:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：11 月 20 日 18:00-19:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：12 月 12 日 17:00-18:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：12 月 18 日 18:00-19:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：2 月 8 日 17:00-18:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：2 月 19 日 17:00-18:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：3 月 4 日 17:00-18:30

出席者：一楽真 西本祐攝 大艸啓 戸次顕彰

場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム

内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

日 時：3月21日 16:00-17:30
出席者：一楽真 西本祐攝 大舩啓 戸次顕彰
場 所：真宗総合研究所プロジェクトルーム
内 容：文字起こし原稿の読み合わせと校正

■国際仏教研究

【会議】

◇国際仏教研究班 全体ミーティング
日 時：10月10日 12時20分～12時50分
場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム
参 加 者：井上尚実、木越康、Dash Shobha Rani、
Michael J. Conway、新田智通、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

◇国際シンポジウム準備会議

第1回
日 時：10月3日 16時20分～17時50分
場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム
参 加 者：井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

第2回
日 時：11月14日 16時20分～17時50分
場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム
参 加 者：井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

第3回
日 時：12月6日 16時20分～17時50分
場 所：真宗総合研究所内 ミーティングルーム
参 加 者：井上尚実、木越康、Dash Shobha Rani、
Michael J. Conway、新田智通、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

◇国際シンポジウムリハーサル

日 時：12月14日 12時30分～14時00分
場 所：響流館3階 メディアホール
参 加 者：井上尚実、木越康、Dash Shobha Rani、
Michael J. Conway、新田智通、
Ama Michihiro、Woo Jongin、但馬普

■EBS (東方仏教徒協会)

◎EBS 公開セミナー

日 時：2023年10月23日 14:40～16:10
場 所：響流館4階会議室
講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年11月27日 14:40～16:10
場 所：響流館4階会議室

講 師：Michael J. Conway

日 時：2023年12月18日 14:40～16:10
場 所：響流館4階会議室
講 師：Michael J. Conway

日 時：2024年1月22日 14:40～16:10
場 所：響流館4階会議室
講 師：Michael J. Conway

◎EBS 公開講演会

◇The Effable Ineffable
日 時：2024年1月16日 18:00～
場 所：響流館3階マルチメディア演習室
講演者：Dr. Graham Priest
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、加藤淳、
藤枝直子、岩崎千裕 ほか

◎EBS 編集委員会

日 時：2023年10月31日 17:00～
場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、筑田一毅、加藤淳、
藤枝直子、岩崎千裕

日 時：2024年1月23日 17:00～
場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、David White、山内美智、
筑田一毅、加藤淳、藤枝直子、岩崎千裕

◎EBS 編集会議

日 時：2023年12月19日 16:30～
場 所：EBS 事務局
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、藤枝直子

日 時：2024年3月14日 18:00～
場 所：EBS 事務局
出席者：Robert F. Rohdes、John S. LoBreglio、
井上尚実、Michael J. Conway、新田智通、
藤枝直子

◎EBS 運営委員会

日 時：2024 年 2 月 14 日 10:30～11:30

場 所：響流館 4 階会議室

出席者：一楽真、平野寿則、柘植至、廣川智貴、
藤元雅文、山内美智、Robert F. Rhodes、
井上尚実、Michael J. Conway、
Ama Michihiro、新田智通、筑田一毅、
加藤淳、藤枝直子、岩崎千裕

◎EBS 顧問会議

日 時：2024 年 3 月 4 日 12:00～12:30

場 所：真宗大谷派宗務所会議室

出席者：木越渉、那須信純、延澤栄賢、一楽真、
廣川智貴、井上尚実、Robert F. Rhodes、
山内美智、蒲池誓、阿部諒、筑田一毅、
加藤淳、藤枝直子

■東アジア・北アジア仏教研究

【国内出張】

◇日 時：2023 年 12 月 2 日

出張先：愛知淑徳大学（愛知県名古屋市）

出張者：松川節、P. デルゲルジャルガル

要 務：日本モンゴル学会 2023 年度秋季大会への
参加並びに講演（P. デルゲルジャルガル
「シルクロードと月氏・匈奴・柔然」、松川
司会・通訳）

【公開研究会】

◇研究会名：草原のシルクロードと仏教の弘通

日 時：2023 年 12 月 1 日

場 所：響流館 3 階マルチメディア演習室

講演者：P. デルゲルジャルガル（モンゴル国立大
学教授）

出席者：松川節、井黒忍、松浦典弘、宗周太郎、中
田裕子（龍谷大学准教授）、牛根靖裕（立
命館大学授業担当講師）、Ch. バトルジ
（モンゴル科学アカデミー歴史・民族研究
所）

■清沢満之研究

【ミーティング】

◇第 7 回

日 時：2023 年 11 月 7 日 14:00～15:30

出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：西方寺出張の成果確認
撮影画像の編集方針の検討

編集画像の確認

◇第 8 回

日 時：2024 年 2 月 8 日 13:00～14:30

出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：文献リスト作成作業の進捗報告

◇第 9 回

日 時：2024 年 2 月 21 日 14:00～15:30

出席者：西本祐攝、西尾浩二、山雄優生

会 場：真宗総合研究所清沢満之研究班ブース

目 的：文献リスト作成作業の進捗報告

■仏教写本研究

【ドイツ・ハイデルベルク大学との共同研究プロジェ
クト公開研究発表会】

◇第 18 回

日 時：2023 年 11 月 10 日

発表者：Prof. Dr. Jessie Pons, Prof. Dr. Frederik
Elwert, Dr. Serena Autiero, Dr. Cristiano
Moscatelli

発表題名：eHeritage project: Digitization of Gandha-
ran Artefacts (DiGA)

会 場：オンライン（Zoom）

◇第 19 回

日 時：2024 年 2 月 2 日

発表者：Larissa Schmid & Karin Druhes M. A.
（Orientabteilung Staatsbibliothek zu Ber-
lin）

発表題名：Qalamos – Connecting Manuscript Tradi-
tions

会 場：オンライン（Zoom）

◇第 20 回

日 時：2024 年 2 月 9 日

発表者：Dr. Oliver Hellwig（University of Zurich）

発表題名：Dating the Vedic Corpus

会 場：オンライン（Zoom）

【海外出張】

◇第 1 回

日 時：2024 年 3 月 2 日～11 日

出張先：バンコク、アユタヤ（タイ）

出張者：ダシュ・ショバラニ（本班研究員・代表者）
Suchada SRISETTHAWORAKUL

(本班嘱託研究員・Mahidol 大学講師)

要 務：大谷大学所蔵写本の資料整理、入力作業、
現地資料調査、情報収集及び現地研究者と
ネットワーク構築・懇談

【国内出張】

◇第1回

日 時：2024 年 3 月 24 日～25 日

出張先：東京

出張者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

戸次顕彰 (本班研究員・庶務)

要 務：資料閲覧、情報交換、協力要請

【招聘講演】

◇第1回

日 時：2023 年 12 月 7 日

発表者：Dr. Peter SKILLING

(EFEO, Chulalongkorn University)

発表題名：Painting the Jātakas in Early Modern
Central Thailand

会 場：マルチメディア演習室・オンライン (Zoom)

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日 時：2023 年 10 月 19 日 16:30～18:00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

新田智通 (本班研究員)

戸次顕彰 (本班研究員・庶務)

場 所：真宗総合研究所内ミーティングルーム

内 容：総括及び今後の研究方針について

◇第2回

日 時：2024 年 1 月 29 日 15:00～16:30

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

宇野ヒカル (本班研究補助者)

KIIT 大学 (インド) の担当教員・学生

場 所：オンライン (Zoom)

内 容：大谷大学所蔵写本目録のデータベース・
Web 公開について

◇第3回

日 時：2024 年 2 月 3 日 15:00～16:00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

宇野ヒカル (本班研究補助者)

Dr. Anand Mishra

(Heidelberg University)

KIIT 大学 (インド) の担当教員・学生

場 所：オンライン (Google Meet)

内 容：大谷大学所蔵写本目録のデータベース・
Web 公開について

◇第4回

日 時：2024 年 2 月 15 日 13:30～14:30

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

Suchada SRISETTHAWORAKUL

(本班嘱託研究員・Mahidol University 講
師)

場 所：オンライン (Line)

内 容：2024 年 3 月のタイ調査の打ち合わせ、情
報交換

◇第5回

日 時：2024 年 2 月 21 日 19:30～21:30

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

宇野ヒカル (本班研究補助者)

Dr. Anand Mishra

(Heidelberg University)

場 所：オンライン (Zoom)

内 容：大谷大学所蔵写本目録のデータベース・
Web 公開について

◇第6回

日 時：2024 年 2 月 23 日 19:30～21:30

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

宇野ヒカル (本班研究補助者)

Dr. Anand Mishra

(Heidelberg University)

場 所：オンライン (Zoom)

内 容：大谷大学所蔵写本目録のデータベース・
Web 公開について

◇第7回

日 時：2024 年 3 月 20 日 18:00～20:00

出席者：ダシュ・ショバ・ラニ (本班研究員・代表者)

宇野ヒカル (本班研究補助者)

Dr. Anand Mishra

(Heidelberg University)

場 所：オンライン (Zoom)

内 容：大谷大学所蔵写本目録のデータベース・
Web 公開について

■大学史研究

【ミーティング・情報交換】

◇第1回

日 時：2023年10月19日14:40～16:00
場 所：真宗総合研究所 フリースペース
出 席 者：藤元雅文、東館紹見
目 的：大谷大学真宗総合研究所における「大学史研究」の課題と方向性について

◇第2回

日 時：2023年10月26日14:00～14:30
場 所：真宗総合研究所 事務室
出 席 者：藤元雅文、山内美智、筑田一毅、加藤淳、岩崎千裕
目 的：「大学史研究」における資料の保管・収集について

【出張】

日 時：2023年10月4日12:00～17:00
出 張 先：立命館大学 衣笠キャンパス
創思館カンファレンスルーム
要 務：全国大学史資料協議会2023年度総会ならびに全国研究会への参加
出 張 者：藤元雅文

■宗教・社会研究

【出張】

◇2023年10月28日～31日

出 張 先：沖縄県（西来院・首里城・沖縄県平和祈念資料館・摩文仁の丘・ひめゆり平和祈念資料館・楽邦寺・地藏院・東本願寺沖縄別院・斎場御嶽・何我寺・照屋漆器店）
要 務：共同研究テーマ「宗教の社会の関係をめぐる総合的研究——現代社会における宗教と共生——」に関わる調査の実施
出 張 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

◇2024年1月26日～27日

出 張 先：大谷大学
要 務：公開シンポジウム「専門職による死別をめぐる実践—個人化社会の共同性—」ならびにその事前準備
出 張 者：陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

◇2024年3月7日

出 張 先：大谷大学

要 務：PD 研究員の研究成果報告会

出 張 者：陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

【公開シンポジウム・公開研究会等】

◇専門職による死別をめぐる実践—個人化社会の共同性—

日 時：2024年1月27日
場 所：大谷大学
登 壇 者：磯部美紀、沼口諭（医療法人徳養会沼口医院理事長・日本臨床宗教師会副会長）、長谷暢（東本願寺沖繩別院輪番）、井口真紀子（祐ホームクリニック大崎院長・上智大学グリーンケア研究所客員研究員）、後藤晴子（大谷大学社会学部現代社会学科講師）
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

◇赤ちゃんを失う悲しみと向き合う—医療・宗教・社会—

日 時：2024年3月10日
場 所：御茶ノ水トライエッジカンファレンス（東京都千代田区）
登 壇 者：陳宣聿、岩井未来（龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授）、蛭田明子（湘南鎌倉医療大学看護学部看護学科教授・聖路加国際大学 PCC 事業天使の保護者ルカの会スタッフ）、白井千晶（静岡大学人文社会科学部社会学科教授）
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

◇親鸞仏教センター所長・本多弘之先生との研究交流会

日 時：2023年12月11日
場 所：親鸞仏教センター 3F 講堂
コメント：本多弘之
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智

【ミーティング】

◇第11回

日 時：2023年10月2日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、鶴留正智
内 容：沖縄調査の事前学習

◇第12回

日 時：2023年10月16日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：沖縄調査について

◇第13回

日 時：2023年11月27日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：沖縄調査の成果整理、今後のシンポジウム・公開研究会について

◇第14回

日 時：2023年12月18日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：シンポジウムの事前学習

◇第15回

日 時：2023年1月15日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：シンポジウムの事前学習

◇第16回

日 時：2023年2月19日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：公開研究会の事前学習

◇第17回

日 時：2023年3月4日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：公開研究会の事前学習

◇第18回

日 時：2023年3月11日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、

鶴留正智

内 容：公開研究会の振り返り、来年度に関して

◇第19回

日 時：2023年3月25日
場 所：大谷大学真宗総合研究所東京分室
出 席 者：福島栄寿、陳宣聿、磯部美紀、澤崎瑞央、
鶴留正智
内 容：今年度の総括

■個人研究 陳班

【学会発表・研究会参加】

◇第64回日本母性衛生学会

日 時：2023年10月13日～14日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：陳宣聿

◇花園大学人権教育研究センター第121回研究会

日 時：2023年10月16日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：陳宣聿

◇日本民俗学会第75回年会

日 時：2023年10月22日
場 所：成城大学
要 務：研究会発表
参 加 者：陳宣聿

◇講研究会第131回例会

日 時：2023年11月19日
場 所：大田区立郷土博物館
要 務：研究会参加
参 加 者：陳宣聿

◇東アジア恠異学会第145回定例研究会

日 時：2023年11月25日
場 所：オンライン
要 務：書評会発表
参 加 者：陳宣聿

◇第20回ジェンダー史学会年次大会

日 時：2023年12月10日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：陳宣聿

◇日本文化人類学会公開シンポジウム——縮減する社会における家族・親族研究と文化人類学——いかようにもありうる生の尊厳に向けて

日 時：2023 年 12 月 16 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇国際日本文化研究センター国際シンポジウム グローバル・コンテクストにおける妖怪の理論化と歴史化

日 時：2023 年 12 月 16 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇東京大学大学院人文社会系研究科 死生学・応用倫理センター 上廣講座

日 時：2023 年 12 月 20 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇佛光大學佛教教學工作坊 02

日 時：2023 年 12 月 28 日

場 所：台湾・仏光大学

要 務：研究会発表

参 加 者：陳宣聿

◇2023 年度東北文化研究室シンポジウム 東北×オカルト——不可視の想像力をめぐって——

日 時：2024 年 1 月 6 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇シンポジウム——東アジアの祖先祭祀を問い直す——少子化、父系理念、家族を超える試みからセンター

日 時：2024 年 1 月 27 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇慶應義塾大学東アジア研究所講演会 歴史人類学と「永泰文献」の解説

日 時：2024 年 3 月 23 日

場 所：慶應義塾大学

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

◇第 147 回東アジア恠異学会例会

日 時：2024 年 3 月 30 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：陳宣聿

■個人研究 磯部班

〈学会・研究会等参加〉

◇日本社会学会第 96 回学術大会

日 時：2023 年 10 月 8 日～9 日

場 所：立正大学品川キャンパス

要 務：学会参加

参 加 者：磯部美紀

◇大谷大学「プレ FD 実践演習」

日 時：2023 年 12 月 4 日

場 所：大谷大学

要 務：ゲストスピーカー

参 加 者：磯部美紀

◇龍谷大学大学院実践真宗学研究科公開シンポジウム

日 時：2023 年 12 月 14 日

場 所：オンライン

要 務：シンポジウム参加

参 加 者：磯部美紀

◇国立歴史民俗博物館基幹研究第 2 回研究会

日 時：2023 年 12 月 16 日～17 日

場 所：国立歴史民俗博物館

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇2023 年度後期第 5 回臨床死生学・倫理学研究会

日 時：2023 年 12 月 20 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇「関一敏氏に宗教学の心を聞く」会

日 時：2024 年 1 月 15 日

場 所：オンライン

要 務：研究会参加

参 加 者：磯部美紀

◇2023 年度第 3 連区青年布教使研修会

日 時：2024 年 2 月 13 日
場 所：神戸別院
要 務：ゲストスピーカー
参 加 者：磯部美紀

◇国立歴史民俗博物館基幹研究第 3 回研究会

日 時：2024 年 2 月 25 日
場 所：多磨霊園、大野屋多摩支店
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

◇国立歴史民俗博物館基幹研究第 3 回研究会

日 時：2024 年 2 月 25 日
場 所：多磨霊園、大野屋多摩支店
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

◇國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所研究会
2023 年度第 4 回

日 時：2024 年 2 月 28 日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

◇エヴァ・イルーズ教授来日連続セミナー第 1 回

日 時：2024 年 3 月 11 日
場 所：日仏会館
要 務：セミナー参加
参 加 者：磯部美紀

◇日本葬送文化学会 3 月定例会

日 時：2024 年 3 月 28 日
場 所：オンライン
要 務：研究会参加
参 加 者：磯部美紀

〈出張記載〉

◇2023 年 10 月 19 日
出 張 先：大谷大学
要 務：専門的知識の提供
出 張 者：磯部美紀

◇2023 年 12 月 21 日

出 張 先：大谷大学
要 務：専門的知識の提供
出 張 者：磯部美紀

■個人研究 澤崎班

【学会発表・研究会参加】

◇佛教史学会第 73 回学術大会

日 時：2023 年 11 月 11 日
場 所：佛教大学
要 務：学会発表
参 加 者：澤崎瑞央

◇科学と仏教思想学会 2023 年度第 4 回研究会

日 時：2023 年 12 月 1 日
場 所：オンライン
要 務：学会参加
参 加 者：澤崎瑞央

◇科学と仏教思想学会 2023 年度第 5 回研究会

日 時：2024 年 2 月 22 日
場 所：オンライン
要 務：学会発表
参 加 者：澤崎瑞央

【出張記載】

◇2024 年 3 月 8 日

出 張 先：大谷大学
要 務：資料収集
出 張 者：澤崎瑞央

◇2024 年 2 月 27 日～3 月 3 日

出 張 先：中国（西安、蘭州）
要 務：研究調査
出 張 者：澤崎瑞央

■個人研究 鶴留班

【出張・学会参加】

◇2024 年 2 月 20 日

出 張 先：専修寺（三重県津市）
要 務：『教行信証』の古写本の閲覧
出 張 者：鶴留正智

◇2024 年 3 月 23 日

出 張 先：京都大学文学部（京都市）
要 務：宗教哲学会第 16 回学術大会への参加
出 張 者：鶴留正智



〈真宗総合研究所ホームページ〉
※最新の情報（研究組織等）については、ホームページにてご確認ください。

研 究 所 報 第 84 号

2024 年 9 月 1 日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435

Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp